

「日本事情」授業の実践報告

—留学生が自分で見つける日本事情—

山本 恭子

(人文学部人文学科国際コミュニケーションコース 日本語・日本事情)

A Report on a Case Study of Teaching Japanese Culture

—An Approach for Foreign Students to Learn Japanese Culture—

KYOKO YAMAMOTO

(Japanese Language and Japanese Studies

Intercultural Communication Course, Humanities)

1. はじめに

留学生教育のためのカリキュラムの中に「日本語・日本事情」という授業科目がある。「日本語」はともかく「日本事情」はその言葉からして非常に曖昧で、これといった確固たる形がなく、多くの場合、担当教員自身の「日本事情」の解釈や理念に従って内容を定め、教材を整え、教授法を工夫して、様々な形で、様々な内容の授業が展開されている。また、社会の変化、留学生（日本語学習者）の多様化により「日本事情」も様々に変化している。このことは毎年開催される中国・四国地区大学一般教育研究会の日本語・日本事情分科会の度毎に「日本事情」が取り上げられて、各大学での「日本事情」教育が紹介され、その他の学会、研究会、シンポジウム、協議会などでも「日本事情」について討議が繰り返されていることから明らかである。長谷川を代表とする「外国人留学生のための『日本事情』教育のあり方についての基礎的調査・研究」^(注1)からもこのような「日本事情」教育の事情を知ることができる。

ここでは『「日本語・日本事情」とは』を文部省令から、『「日本事情」とは』を諸例から確認し、高知大学における「日本事情」教育の現状と日本語・日本事情担当者による授業の一つの試みを報告し、試みの結果として留学生のレポートを添付する。

2. 「日本語・日本事情」とは

まず、「日本語・日本事情」はどのように定められ、どのように扱われてきた科目なのかを確認しておく。昭和37年4月18日大学設置基準の一部を改正する省令が公布施行され、文部省大学学術局局長から国公私立大学（短期大学を除く）長あてに「外国人留学生の一般教育等履修の特例について」という通知が出され、外国人留学生の一般教育等の履修について特例が設けられた。すなわち、「3 特例による科目開設にあたっての留意事項」(1)に、「日本語科目および日本事情に関する科目（以下日本語科目等という。）を置き、これを開設する場合、いくつかの授業科目に分けて実施することができるものとする。たとえば、日本事情に関する科目としては、一般日本事情、日本の歴史および文化、日本の政治、経済、日本の自然、日本の科学技術といったものが考えられる。」とある。

また昭和45年の大学設置基準の改正によって、外国人留学生に対する教育を実状に即して改善するため、卒業の要件について、日本語・日本事情をもって一般教育科目、外国語に単位の振替が認められる措置が講じられた。さらに平成3年7月に制定された「新しい大学設置基準—一般教育」では、外国人留学生に係わる卒業の要件について「一般教育科目について卒業の要件となる単位の振替措置に弾力性をもたせたこと」とあり、「外国人留学生に対する日本語あるいは日本事情に関する教育を実状に即して充実することができるようになった」という説明が加えられている。

これによって「日本語・日本事情」教育も個々の大学の自主的な判断に委ねられるようになったことから、今こそ「日本語・日本事情」教育を、改めて、留学生のみならず大学の構成員すべてに係わることとして考える再出発とすることができる。アメリカ合衆国カリフォルニア州立フレズノ大学副学長(1992年) Dr. Best の談話の中の「留学生の存在しない大学は University ではありえない」という言葉は「日本事情」のたどるべき道を示しているのではないだろうか。

3. 「日本事情」とは

「日本語・日本事情」科目が高知大学に開設されたのは平成元年度(1989年)である。以来、高知大学では、文部省のガイドラインを道標に、先に述べたように、日本語担当教師個人の「解釈や理念」に従って、「日本事情」の授業を開講してきた。日本語担当教師として、可能な範囲で、日本の社会、歴史、経済、国際関係等を扱ってきたが、教師の専門知識にも限界があり、又多様な背景を持つ留学生も受取り方がまったく異なることがしばしばであった。「日本事情」とは、前述のガイドラインに示されているものの、直接係わっている授業担当者、そして留学生はどのようにとらえているのであろうか。先に述べた中国・四国地区一般教育研究会で出された意見、科学研究補助金研究成果中間報告とその成果報告でまとめられているもの、留学生および授業担当者のアンケートなどから考察する。

3-1 中国・四国地区大学一般教育研究会

中国・四国地区大学一般教育研究会では日本語・日本事情分科会が開設されて(1990年)以来何回となく、「日本事情」科目をどのように扱っているのか、その組立や内容について紹介、意見交換がなされ、各大学に合った形を模索している実状が報告されている。平成8年5月、岡山大学において開催された第44回中国・四国地区大学一般教育研究会の日本語・日本事情分科会の中でも「日本事情クラスの日本人学生の受講について」という承合事項が提出され、現在各大学で行われている「日本事情」教育が紹介された。

協議資料として今までに提出されたアンケート結果や協議記録から日本事情の授業で扱っているテーマは次のように分類できる。

- ① 歴史、近・現代史
- ② 時事問題、社会事情、国際関係、日本の国際化、環境問題
- ③ 生活、習慣、マナー、年中行事、家庭生活、食生活、冠婚葬祭
- ④ 農業、経済、会社事情、日本の企業、企業経営の特徴
- ⑤ コンピュータ
- ⑥ 地理、自然と文化
- ⑦ 口承文芸、民俗

また提出された「日本事情」教育の目的、理念は言葉や表現方法は違っても次のようにまとめることができる。

『「日本事情」教育は現在の日本、日本人に対する理解を深めるため、ステレオタイプの日本文

化にとどまらない広い意味の文化を紹介し、今日的なテーマであっても歴史的、民族的視点に立ち、教えるというよりお互いの討論を媒介に自ら日本文化を見る目、また同時に自国文化を見る目を培い、さらにはお互いの文化を考える機会を与える教育である。」

3-2 科学研究補助金研究成果中間報告書および成果報告書

「日本事情」の現状と目的を長谷川らの調査・研究の報告書の中で佐々木^(注2)は、大学、短大及び高専で行われている「日本事情」の授業内容を授業題目から次のような分野にグループ分けしている。

- ① 「日本の政治」「日本の教育」などのように「日本」で始まる現代日本への理解を深めることを主目的とすると思われる授業
- ② 環境問題、女性差別など問題意識を前面に打ち出している授業
- ③ 「日本人」という言葉で始まる、日本人の行動様式を中心とする領域と思われる授業
- ④ 「～地方」で始まる、地域についての、より深い理解を主目的とする授業

又、同じ報告書で長谷川は授業内容の全体的傾向を次のように整理している。

- ① 日本という地域を構成する要素：自然、地理、風土
- ② 日本社会を構成する要素：現代社会、経済、政治、法律
- ③ 個人を中心とした生活：生活、衣食住、家族、結婚、家計、生活様式
- ④ 日本人の行動の原点：文化、年中行事、民俗、風習、思考様式、行動様式
- ⑤ 歴史
- ⑥ 学校の立地する地域について

「日本事情」の教育目的について、砂川^(注3)はそのアンケート項目Q17^(注4)に対する回答の分析を行い、『「日本事情」の概念的イメージ』は“「教育科目」としての在るべき姿”として描かれていると述べ、次の4つの類型に分類している。

- 第1類型 日本文化・日本社会理解型
- 第2類型 文化的・社会的視野拡大型
- 第3類型 日本語教育補完型
- 第4類型 適応教育重視型
- 特異例

またアンケート回答から「日本事情」で“何”を教えようとしているのかを読み取り、次のような教科内容の類型化を試み、

- 第1類型 文化的・社会的特質型
- 第2類型 個別的専門背景知識型
- 第3類型 個別諸領域総合知識型
- 第4類型 一般的・常識的知識型
- 特異例

の4類型に分類している。そしてさらに言及して「教育目的」と「対象領域」（教科内容）との関係から「大学などでの日本事情においては“討論や発表など学生との対話を重視しつつ、文化的・社会的な特質を他国の実情と比較して扱いながら、日本文化や日本社会の理解を目指す”という

“イメージ”が浮かぶように思われる」と概観している。

3-3 アンケートに見られる留学生の「日本事情」に対する期待

高知大学における「日本事情」の授業について毎年実施しているアンケートの結果を解析した。

- (1) 受講した「日本事情」とその授業に対する感想
- (2) 興味のある分野（「日本事情」でなにを学びたいか）
- (3) 「日本事情」はどんな科目であるべきか（「日本事情」をどうとらえているか）
- (4) 希望する授業形式

(2)については、受講生が多様であるゆえ、当然のことながら「経済」から「各年齢層の日本人の人生観」まで実に様々な具体的な分野が回答されている。

- ① 日本の歴史
日本の地理
日本の政治
日本の経済
日本の社会
- ② 日本の文化
日本文学
- ③ 現代社会問題。いま、日本で存在していること
- ④ 特別な習慣
- ⑤ 留学生にとって不思議と思われること。日本人にとって失礼なこと。
- ⑥ 毎日の生活、生活方法、生活環境、料理
- ⑦ 人、人情、考え方、人生観
- ⑧ 日本の国、日本のこと（長所、短所）、日本の名人
- ⑨ ビジネス日本語

次に「(3) 日本事情はどんな科目であるべきか」について次のような回答が得られている。

- ① 日本事情というのは外国人が一番知りたいことを主として行う授業だと思う
- ② 日本人が身につけること、日本人の生活、文化、習慣、風俗、歴史、教育、年中行事、考え方、価値観などを学びたい
- ③ 今の日本の文化と関係のある歴史に興味がある
- ④ 単なるある分野の勉強ではなく、より広い範囲で、日本人の考え方や日本人の慣行および日本を留学生に紹介すべきだと思う
- ⑤ 日本に関するさまざまな知識を勉強する授業だと思う
- ⑥ 教室内の授業だけでなく、見学したり、日本人と交流したり、現実の中の日本事情はいったい何か、それを理解して日本を深く知る授業
- ⑦ 日本の事情、風土、人情などの紹介をすべき
- ⑧ 新聞の記事を読む授業、いろいろな日本文化のことについて、特に祭や辞書にのっていない言葉や新しい言葉について学ぶ授業
- ⑨ 日本事情の授業は日本語の授業と違って、日本について詳しい情報をもらい、いろいろな知識を習うための授業であるべきだと思います
- ⑩ 日本の事情を見学とかホームステイとかから発見した。日本の現在や伝統などの問題について討論する授業であるべきだ

⑪ 勉強した日本語をつかいながら一般的な日本の事について学ぶ授業です。毎週宿題としてレポートを書けばいい勉強になると思います。いま、日本人はどんな普通の生活をするか、あるいは日本での生活を学んでいて、自分の国とくらべることができるような授業ですという声が聞かれる。

「(4) 希望する授業形式」について、今までに行ったアンケートを整理すると

- ① 見学
- ② 体験
- ③ ビデオ鑑賞

を希望するものが多く

- ④ 討論
- ⑤ 演習

と続き、全部の授業が演習や討論形式であるというのは無理だという意見もあったが、

- ⑥ 講義

を希望するものは少なかった。

もちろん演習でも教師による解説を希望すると書いた者やいろいろな方法を混ぜたほうがよいという意見もあったが、「先生は下を向いて話すだけである」、「学生が授業中に寝ている。信じられない」、「授業中質問する人が皆無である」、「個人的にもっと接するほうがよい」といって、いわゆる一般的な講義にはなじまないようである。その他授業の時日本人と深く交流したいという意見も出されていた。

このアンケートから、留学生が求める「日本事情」は、現代の日本人の生活に現れるもの、教室の中での講義だけでは学べない事、日本人との接触によって認識でき理解できるものであることが読み取れる。

長谷川らの授業方法についての調査報告によると、多くの授業が様々な活動の組合せからなっていると分析し、その活動を

- A 講義形式
- B 討議形式
- C 学生発表形式
- D 教材読解形式
- E 教材聴解形式
- F 校外学習形式

に分類し、A→Fの順にその比率が大きいということを示している。

高知大学でのアンケート結果と比べると、全国の大学や短大・高専で行われている授業方法は、高知大学の留学生が希望する授業形態の逆になっている。ただ、砂川はアンケート項目Q17に対する回答から得られた授業形態の理念を次の3つに分類し、

- 第1類型 対話重視型
- 第2類型 比較重視型
- 第3類型 体験重視型

さらにアンケート回答には“複数教師の協力による授業”について言及しているものもあったということに触れており、このように実際におこなわれている授業の形態とは多少違った結果が出てきている。これは高知大学の留学生の「『日本事情』がどうあるべきか」という質問に対する回答に近いものであり、やはり理念を実践することの難しさが現れている。

4. 高知大学における「日本事情」

4-1 高知大学で開講された「日本事情」(共通教育)

平成元年度から5年度までに開講された「日本事情」のうち、日本事情Ⅰ、Ⅱは日本語担当教師が、日本語Ⅲは他の専門教師が担当した。

平成元年度	テキスト等	
日本事情Ⅰ	日本の社会	
日本事情Ⅱ	高知の歴史と産業／日本の社会	
日本事情Ⅲ	日本の歴史	
	*日本の自然と文化	
平成2年度		
日本事情Ⅰ	日本の歴史	「日本の歴史」
日本事情Ⅱ	日本の社会／日本の近代化	「日本入門」
日本事情Ⅲ	*日本の自然と日本人の心情・日本人と木の文化	
平成3年度		
日本事情Ⅰ	日本の歴史(近世)	「日本文明77の鍵」
日本事情Ⅱ	国際関係	新聞記事, プリント
日本事情Ⅲ	*日本の歴史	「留学生のための日本史」
	*日本の風土	プリント
平成4年度		
日本事情Ⅰ	日本の歴史(近代)	「日本文明77の鍵」
日本事情Ⅱ	日本の経済	「日本語で学ぶ日本経済入門」
日本事情Ⅲ	*紙と木そして地球環境問題	プリント, ビデオ
	*日本の自然地理と日本人の意識・文化	
平成5年度		
日本事情Ⅰ	日本の社会	「日本—その姿と心—」
日本事情Ⅱ	国際関係	「留学生のための国際関係」他
日本事情Ⅲ	*日本の歴史	「留学生のための日本史」
	*日本の風土	プリント

平成6年度からの新カリキュラムでは日本事情Ⅰ、Ⅱは日本語担当教師が、日本事情Ⅲ、Ⅳ、Ⅴは他の専門教師が担当している。

平成6年度		
日本事情Ⅰ	日本の歴史—近世—	「日本文明77の鍵」
日本事情Ⅱ	日本の歴史—近代—	「日本文明77の鍵」
日本事情Ⅲ	地球環境	プリント, ビデオ
日本事情Ⅳ	*日本の風土	プリント
日本事情Ⅴ	*土佐の祭 集中講義	

平成7年度

日本事情Ⅰ	年中行事（4月～8月）	プリント，新聞記事
日本事情Ⅱ	年中行事（9月～3月）	プリント，新聞記事
日本事情Ⅲ	*日本の歴史	「留学生のための日本史」
日本事情Ⅳ	*日本の風土	プリント
日本事情Ⅴ	*高知の産業 集中講義	プリント

平成8年度

日本事情Ⅰ	日本と留学生の母国との関係	プリント，新聞記事
日本事情Ⅱ	日本人の価値発見	（2学期開講）
日本事情Ⅲ	*日本の産業と地域	日本経済図説
日本事情Ⅳ	*日本の風土	（2学期開講）
日本事情Ⅴ	*集中講義	

*非常勤講師

4-2 「日本事情」の授業担当者

高知大学では現在「日本事情」について、日本語担当教員の筆者が2コマを担当し、日本語以外の異なる専門分野の者（非常勤講師）が3コマを担当している。「日本語・日本事情」科目開設以来、人文、社会、経済、自然科学分野のそれぞれ異なった専門を持つ6人の講師に依頼してきた。毎学期、なるべく専門が重複しないようにプログラムし、「日本語・日本事情」担当教員のカバーできない分野を担当してもらうことを構想して、授業内容については特に要求を出さずに依頼してきた。それは留学生には内容のみならず、個人的なふれ合いの中で日本事情を学んでもらうことを目的としたからである。開講授業は別表の通りであるが、この度初めて、「日本事情」担当者にアンケート調査を行い、「日本事情」教育についての考えを得ることができた。先にも述べたように、依頼時には、特に「こんなことを」「こんなふうに」と依頼したわけではない。

「『日本事情』をどの様に捉え授業に反映させているか」という設問に、

- ① 「日本事情」は日本の文化的、社会的特徴を良い面も悪い面もあるがままだに伝え、日本に対する認識を深めてもらえることを意味し、専門が化学であり、森林化学の授業を担当しているので、環境問題をとりあげた。
- ② 自然地理的な側面に基盤をおいた「文化の形成」を解説したいと考えている。ただ、自然環境を客観的に説きさえすれば文化特性に直結するのではなく、環境に対応した日本人と日本社会の主体的な歴史的蓄積にこそ特性があると考えている。民族の歴史、言語や文字文化、社会習俗、宗教、行事などに表現されるものにも言及している。また、日本の特質を絶対視する事なく、相対的、一般的な価値観で解説できればと思っている。
- ③ 日本をただ経済大国、先進資本主義国としてだけ一面的に捉えて欲しくない。いろいろ日本社会には問題があり、世界に誇っていい面と、外国特にアジア諸国に恥じなければならない面とがあることをはっきりさせなければならない。また、日本（人）らしさをわかってもらわなければならない。授業はなるべく地域に即して、経験を通して日本の歴史の真実を話している。

という回答が得られた。それぞれ専門の立場にたって、「日本事情」、「留学生教育」を深く認識し、留学生に対応していることが理解できる。どの回答の中でも、留学生の多様性—日本語運用能力、文化、留学生の日本に対する既成概念、留学目的が異なっていること—にとまどい、授業運営の難しさを述べている。

4-3 「日本語」担当教師による「日本事情」

ところで、日本語担当教師の担当する「日本事情」はどうあるべきか。このことは「日本語・日本事情」開設当時からの大きな課題である。開設当時は前述の事柄、「日本事情とは」、「何をどのように教えればよいのか」などまったく見当がつかなかった。その後、明確な答えの出せないまま、毎年テーマを変えたり、他校の例を参考にしたりして試行錯誤しながらやってきた。「日本の社会」、「日本の経済」というふうに、概説的なものを与えるだけでは留学生の興味をひかないし満足を与えない。一口に「日本の歴史」と言っても、ただ年号とできごと、登場する人物の解説だけでは不十分で、特にそれが外国と関係のあることであれば、その国から見た事実というものがあり、授業に参加している留学生に係わっている場合が多い。「日本事情」の広い範疇を考えると、日本語教師には専門性において限界があるのは明白である。また、アンケートにも現れたように教師側からの一方的な講義中心の授業はなかなか成り立たない。「日本語」の授業であれ「日本事情」の授業であれ、留学生のクラスでは講義内容とは直接関係のない質問や意見などがどんどん出される。日本人にとって当り前のことが外国人にとってもっとも理解できないことや知りたいことであるかも知れない。戦争のこと、教育のこと、日本社会における男性の地位、女性の地位、差別問題、所かまわずでてる。時には日本批判になったり、自国の反省になったりする。他の国の情報を得ることもできる。大きく言えば日本の文化が問題になり、クラスは異なった文化がぶつかり合い、異文化接触の発露の場となる。

このような「日本事情」のクラスを見て、「日本事情」が日本理解のための「文化」を教える授業であるならば、歴史や日本の伝統文化などの知識を与えることも重要であるが、「日本事情」を自ら見つける方法もあるのではないだろうかという考えに至った。異文化のぶつかり合う所で様々な文化を認識し、異文化に対する態度を体得する。「日本事情」が異文化理解の役を果たすことも考え得るのではないだろうか。専門性はさておき、多様な留学生のクラスを運営する困難さは「日本語」教育においても同様であり、「日本語」の授業でと同じ様に、多様な留学生の能力に合った授業参加を求め、留学生の持っているものを引き出しながら授業をおこなう「日本事情」であれば、日本語教師がその役を果たすことができる。「日本事情」科目をどのように捉えるかを考えるとき、最終的にはやはり「日本語」、「日本事情」ではなく「日本語・日本事情」にたどりつく。日本語の文字や文法から始まる日本語教育と広い意味の日本の文化「日本事情」を伝える教育とは切り離すことができないということである。次章では留学生の修得した読む、書く、話す、聴く能力を引き出し、学生の能力に合った授業参加という形の「日本事情」の試みについて述べる。

5. 「日本事情」教育の一つの試み

留学生の多様性を考慮し、「日本事情」をどのように捉え、その内容がどうあるべきかを考えた場合、単に日本の文化や習慣を知識として与えるだけでなく、留学生がそれらをどう受け止められるか、自らの目で確かめる機会を与えることが考えられる。「日本事情」では「日本文化」の体系的見方を学び、その上でそれを体験する複合授業の形が効果的な日本理解の方法であろう。上記において「日本事情」の捉え方を確認し、ここでは日本語教師にできる「日本事情」の授業の試みとして、平成3年度、平成5年度、平成8年度に行った「自分で見つける日本事情」の授業の実践報告をする。

この授業は、日本と他の国々との関係から日本を見、留学生や留学生の母国から見た日本、留学生が日本から見た世界が、新聞、テレビ、個人対個人の交流等を通して、日本の現代の社会にどのように現れているのか、自分の目で日本事情を見つけないことを目標に掲げ開講した。目標を果たすために、課題を与え、インタビュー、資料調査、報告、意見発表等、自ら読み、書き、考え、

発表するなど学習者中心の作業を主とした、一種のプロジェクト・ワークの授業を組み立てた。

5-1 平成3年度「日本事情Ⅱ」

通年で開講された「日本事情Ⅱ」の前期の一部を使って「国際関係」をテーマに試みた。

授業目標

「日本と他の国々との関係から見た日本」, 「留学生や留学生の母国から見た日本」, 「留学生が日本から見た世界」が日本の現代の社会にどのように現れているのか自分で日本事情を見つける。

授業内容

テレビ, 雑誌, 新聞記事等の資料に現れた日本の社会, 日本人の生活, 日本人の考え方などを, 特に他の国々との関係に重点を置いて紹介し, 学習者の討議へと導く。また学習者自ら自国と日本との関係を, 日本人へのインタビューや日本で発刊された新聞を通して調べ, 発表させる。すなわち, 自ら読む, 書く, 考える, 発表する, 人の意見を聞くなどの作業をさせる。

授業方法

留学生の作業

資料調査, インタビュー
報告
意見発表
質疑, 討論
レポート提出

受講生

- | | |
|-----------|---|
| A マレーシア | 経済学科2回生
3年前来日, 2年間東京の日本語学校で日本語を学び高知大学に入学。
マレーシアでの同級生が1年先に高知大学に入学していた。 |
| B マレーシア | 栽培漁業学科1回生
1年間東京で日本語を勉強, 高知大学に入学して6週間。 |
| C オーストラリア | 日本語・日本文化研修留学生
日本語学習歴3年で来校。オーストラリア生まれ, 18歳の時オーストラリアに移住。 |
| D 中国 | 研究者
中国で2年4カ月, 高知大学で6カ月日本語を学ぶ。 |
| E 中国 | 研究生
独学と夜学で3年6カ月, 高知大学で6カ月日本語を学ぶ。 |
| F アメリカ | 日本語・日本文化研修留学生
日本語学習歴1年で来日。「日本事情Ⅱ」は来日半年後に受講。
父親が日系アメリカ人。 |
| G オーストラリア | 交換留学生 |

H ブラジル
日本語学習歴 2 年
高知県費留学生 (研究生)
日系 2 世. 両親が高知県出身 (高知大学卒業生)

受講者の母国はマレーシア (2), アメリカ (1), オーストラリア (2), ブラジル (1) そして中国 (2) と比較的バランスの取れた構成であった. 日本語運用能力は, 主観的な判断であるが, 上級レベルが 4 人, 中級レベルが 2 人, そして初級レベルにいる者が 2 人であった. 運用能力は日本語学習歴の長さとは相関関係はない. この中でマレーシア (中国系) の 2 人のみが正規学部留学生である.

授業の進め方 (留学生の作業を中心として)

第 1 回 オリエンテーション

留学生の母国での一般的な日本観・日本人観の紹介

第 2 回 日本に対するイメージと来日後の印象

来日前に持っていた日本, 日本人に対するイメージと来日後の印象, そしてイメージと実像, 日本に来てから, 日本人に会ってから, 日本観, 日本人観は変わったかななどを発表.

第 3 回 留学生の母国に対して日本人が持っているイメージ

学内, 学外の 5 人の日本人に, 留学生の母国についてどんなことを知っているのか, どんな国だと思うのかなどについてインタビューを行い, そのインタビューについて報告させると共に, インタビューに際し日本人はどんな反応を示したのか, インタビューをしての感想等も報告させる. 最終的にそれらを整理してレポートを提出させる.

第 4 回 日本の新聞に現れた母国

3 月 31 日 ~ 5 月 10 日の新聞から一週間ずつに分けて母国に関する記事を調べ, 数, 種類, 内容を報告させる.

第 5 回 レポート提出「日本の国際化」

あえて「国際化」という言葉を使い, 第 1 回から第 4 回までのクラス活動を通じて, 留学生が自分を日本の社会に置き, 日本をどのように見たか, 今の「日本の国際化」とは, これからの日本の「国際化」はどうあるべきかまとめ, レポートとして提出させる.

プロジェクト・ワークの経緯と結果

① 日本観・日本人観・イメージギャップについての報告

留学生は来日前, 日本や日本人についての情報はマスコミや日本から帰国した知人や同僚から得ていた.

一人のオーストラリア人学生の報告は「オーストラリアのマスコミでは, 日本は経済大国で, 日本人は働きバチで, 自分の家族, 自分の会社, 自分の国しか考えていないと描写している.

戦争の思い出やサムライ映画、そしてオーストラリアを訪れる旅行者やビジネスマンの態度を見て非常に不安であった。日本人は文化的理解がないし友達もできないからである。自分も一生懸命日本語を勉強して、日本人と知り合いになろうとしても失敗ばかりだった。しかし、歴史と習慣を勉強してわかるようになったし、友達も増えてきた。」という内容であった。

別のオーストラリア人学生は来日前、「日本人がオーストラリアの文化を『砂』と『サーフィン』と考えるのと同じように、日本は生け花や茶道、書道など伝統的な文化に皆が参加している」と思っていた。来日後、「日本の文化は野球、マンガ、カラオケ、テレビ、パチンコだということ、しかし、伝統的な日本の文化も無視されずに残っていて、特別の日に重要な意味を持っているようだということ」を発見している。

何人かの学生がとりあげた事の一つに女性（妻、母親）に関することがある。来日前の日本の母親像は、「家にいて家庭と子供の教育に一生懸命」であった。来日後ブラジル人学生は「どこの母親も殆ど外で仕事をしている。生活が便利になり、学校教育が発達し、学校に子供を送って、一日中家が空でも問題がないようだ」と見ている。共働きが当り前の中国の男性は電気製品にかこまれたきれいな居間で、夫が「お母さん、ビール！お茶！」と言えば、妻が「はい、はい。」という場面を羨ましく思っていたが、渡日後60歳～70歳のおばあさんが自転車やバイクで仕事にいくのを見て驚いたといっている。また中国人女性研究者は、日本の「妻」は仕事をせず家事ばかりでつまらないだろうと思っていたが、来日してみると主婦には自分のグループがあり、スポーツや生け花を楽しんでいると興味を持って見ている。「日本人の女性は、いいか悪いかわからないが、とても女性らしい。男女同権はまだまできていない」と女性の社会的地位に興味を示した感想も聞かれた。そのほか経済強国のイメージと実像、敬語の使用、満員電車のなかでの読書、漫画の氾濫など日常生活のなかで日本人と触れ合って得た日本観などが示され、眼前に「日本」があぶり出された感がある。同時に、イメージギャップ、カルチャーギャップの間で、「日本」での生活が厳しいと、適応に困難さを感じる者、ここは日本だから日本の習慣とやり方が正しいと自分のアイデンティティを超えた留学生などの姿が現れている。

② インタビュー報告 日本人の持っている留学生の母国に対するイメージ

日本人との交流を希望しながらそのきっかけが掴めないということを留学生からよく聞くと、留学生が自ら日本人との接触を働きかけるのは容易ではないという。インタビューによってすぐに交流が始まる訳でもないが、言葉を交わすことによってお互い何かを感じとり、そこに新しい関係が生まれるであろう。こういうことも期待してこのプロジェクトを課した。予め、日本人にどう話しかければよいのか、どんな質問をするのか、準備してインタビューに臨むよう指導した。

インタビュー後の報告では、日本人は留学生の母国に対して、例えば、ブラジルなら「サッカー」、「カーニバル」、オーストラリアであれば、「コアラ」、「きれいな海」、「キャプテンクック」そして最近では「オーストラリアフェアー」、「牛肉」というように日本のイメージが「フジヤマ、ゲイシャ」、「トヨタ、ソニー」と言われる程度のイメージしかなく、あまり政治などについては詳しい知識がないようだということであった。

カリフォルニアは知っているけれどフレスノは知らない、マレーシアは知っているけれど（しかしシンガポールと同じ国だと思っていた）ペナンは知らないと言われ、説明するとぜひ行きたいと言ってくれてうれしいという報告もあった。中国はどんな国だと思うかという問に対して、「人口が多い。多民族。広い国土。生活レベルはまだ低いが変化している。生産高が

増加している。経済改革しながら政治改革している。天安門事件を見てもっと自由になったほうがいいと思う。残留孤児の世話のことを知り、中国にはいい人がいると思う。中国は日本の先祖、いろいろな文化を輸入した。」などのような回答があったということであった。

そして、日本人は留学生のインタビューに恥ずかしがり、あまり自分の気持ちや意見は出さず、悪い感想は出ていない。相手を傷つけないようにと悪いことは避けているのだろうか。いろんな言葉遣いや言い方があるようだが、もっとはっきり自分の意見を表すほうが相手に親切ではないかというのがインタビューをしての留学生の感想であった。しかし、中にはインタビュー相手と「外国人と友達になれるかどうか」についての議論にまで発展した事例も紹介され、「ドウシテ」「ワカラナイ」という結果になったようであるが、友人同士でも普段話題にしないようなことを話し合える機会にもなったようである。

最初は5人の日本人とのインタビューというのは少々無理かと心配したが、留学生が半ば興奮気味に報告する様子を見ると、このインタビューの課題を通して、日本人の留学生の母国に対する漠然としたイメージ、知識、日本人のインタビューを受ける時の態度を認識し、日本や日本人の中に新たな発見をしたのではないかということが伺える。

③ 新聞記事の調査結果

報告を国毎にまとめると、

オーストラリア：ほとんどない。Ken Doone がNECかなにかの広告にでていた。

ブラジル：サッカー選手の記事

マレーシア：掃海艇が寄港した記事

中国：中曽根、竹下、社会党の田辺委員長の訪中
中国首脳のスweep艇派遣に対する対応

アメリカ：多すぎて報告できない。

わずか10日ばかりの調査では全体像はつかめないが、これだけでもある程度の日本と各国の関係、そしてそれがどのような関係であるか見ることができ、留学生からも「自分の国は日本にとってあまり重要ではないようだ」、「中国は政治的に日本との係わりがある」などの感想が述べられた。

④ 「日本の国際化」レポート(資料1)

大きなテーマのレポートであった。ともすると常套句の並べられたありきたりの内容になりがちである。しかしながら、留学生が自分を異文化(日本)の中に置いてどのように受け止められているのかを認識し、そういう異文化(日本)をどのように見ているのかによって日本の有り様が見えてくるのではないかと、繰り返しになるが、あえて「国際化」という言葉を用いたが、留学生はそれぞれが与えられたテーマに問題意識を持って取り組み、今立っているところから真の意味の「国際化」を考えてくれた。この授業の成果として留学生の「日本の国際化」のレポートを後に掲載する。自分の言葉でこれだけのレポートが書けたということはこの授業の目標をほぼ達成することができたと言える。留学生のレポートにはほとんど朱は入っていない。漢字の使用もそのままである。中には母語から訳したものもあるかも知れないが、どれも普段のクラス活動を反映したものであり、自分の言葉で書かれている。

平成3年度の「日本事情Ⅱ」では受講生の日本語運用力の差が大きく、最初はクラス運営に困難さが心配されたが、中に3人リーダー格がいて、発表者、報告者のモデルとなり、また、

ほかの発表に対して的確な質問、意見を述べるなど常にクラス活動を活発にしてくれた。そのために初級レベルの者も持っている力で自分を表現することができた。4種類の課題を次々と与えたが、受講生全員、提出期限を守り、準備を整え、意見発表、調査報告、レポート提出とこなしていった。このことも授業をうまく運ぶ要因となった。

5-2 平成5年度「日本事情Ⅱ」

平成3年度の「自分で見つける日本事情」を一つの形に確立すべく、再び同じ方法で「日本事情Ⅱ」を試みた。授業目標、内容、方法はほぼ前回通りに設定した。受講生の構成は下記のように、台湾（4）、中国（3）、韓国（1）で、すべて正規学部留学生であった。従って日本語運用能力は、ある程度の差はあるものの様といつてよいと考えられる。さらに前回と異なる点は、授業では、「国際関係」のテキストを使用しながら平行してこのプロジェクトを行ったことである。その理由としては、まず第一に、多様な文化を持った留学生が、国際社会における「国際関係」の動きと仕組みを理解せずして自分達の置かれている場を認識することは不可能ではないかと考えたからであり、第二に、最初のオリエンテーション時に受講生が自ら発表するという授業方法にあまり興味を示さなかったからである。

受講生

A 台湾	人文学科（1）
B 台湾	経済学科（1）
C 台湾	教育学部（1）
D 台湾	教育学部（1）
E 中国	経済学科（1）
F 中国	理学部（1）
G 中国	教育学部（2）
H 韓国	経済学科（1）

授業の進め方

「国際関係」の講義を続けながら課題をあたえる

- 第1回 留学生の母国について発表
お互いの国に対しての印象について話し合う
- 第2回 日本観、日本人観
- 第3回 5人の日本人にインタビュー
留学生の国に対して日本人が持っているイメージ、知っていることをなど聞く
レポート提出、発表
- 第4回 新聞記事を調べる
母国についての記事を一週間分の新聞で調べる
- 第5回 夏休み宿題レポート
現在問題になっている国際関係
私の見る日本

プロジェクト・ワークの概要

ここではプロジェクト・ワークの内容の詳細については省略し、この種のプロジェクト・ワー

クが一つの形として成り立つかどうか確認するために、その経緯の概要をのべるにとどめる。

受講生に課せられた課題と作業はほぼ平成3年度と同様であったが、上で述べたように、条件の多少の違いが存在する。特にクラスの構成が、台湾(4)、中国(3)、韓国(1)とアジア系留学生が中心であったため、欧米系その他の留学生の混じり合ったクラスとは大きく様子が異なった。平成3年度の受講生の出身国、アメリカ、オーストラリア、ブラジルでは常に自分の意見をはっきり示すこと、自分を表現することが求められているという。個人差はあるが、背景となる文化(特にいままでに受けた教育)によって、教師の意図するところの理解の仕方、意見の述べ方、発表の仕方、レポートの書き方、レポートの提出方法にいたるまで不慣れであった。翻ってみると、教師自身も外国語教育を始めとし一筋に西洋文化のみを追いかけてきたため、そのような学習態度も欧米の学生の方をあまり抵抗なく受け入れることができるのかも知れない。

前回と異なり、クラスにリーダーの役を果たす学生がいなかったこともクラス開始時に活動が活発にならなかった原因と考えられる。教師側もクラス構成を意識し過ぎ、一人一人の能力を十分に引き出すことができず、クラス運営の難しさを痛感した。

日本人へのインタビュー、新聞調査の報告と回を重ねる毎にクラス活動も盛んになり、ゼミや寮の友人を総動員してインタビューに応じてもらったという報告もあった。

インタビュー後、「日本人は(留学生の国に)あまり興味をもっていないようだ」、「本当のことを知らない」、反対に、「住んだことのある人や行ったことのある人はいい印象を持っている」、「経済改革や経済発展には関心を持っている」等の感想を述べている。もう一つ中国人留学生の感想を原文のまま紹介しておく。

「ゼミの皆さんはさまざまな中国の印象を言ってくれました。彼らの話によるとあまり中国のことを知らないようだ。私は中国の人としてできるだけ中国のことを彼らに紹介したいと思った。けれども、恐らく私の考えも極端ですから、皆さんに言って本当にいいのか。むしろ、休みの間、中国に旅をしたらよいと思う。自分の目で中国のことを覚えて、中国人と友になったら一番いいじゃないかなと思います。」

5-3 平成8年度一学期「日本事情Ⅰ」

第3回目の「自分で見つける日本事情」を、平成8年度1学期開講の「日本事情Ⅰ」で試みた。「日本と留学生の母国との関係」をテーマに一学期開講される14回の授業をすべて当てた。授業目標、授業方法は第1回目と同様である。プロジェクト・ワークの課題は変えず、途中、現在日本で話題になっていること、自分が興味を持ったこと、日本の社会で気が付いたことなどから自らトピックを見つけ、それについて発表することを課した。受講生は8人で、正規学部留学生は4人である。留学生の出身国は下に示すように、中国(3)、オーストラリア(3)、マレーシア(1)、モンゴル(1)である。日本語運用能力は様ではないが、中級半ばから上級にかけたレベルである。

授業内容の詳細は省き、概要を述べ、授業の最終回に行ったアンケートの「日本事情Ⅰ」に対する留学生の感想、意見を紹介する(原文のまま)。

受講生

- | | |
|---------|----------|
| A 中国 | 情報科学科1年生 |
| B 中国 | 情報科学科1年生 |
| C 中国 | 情報科学科1年生 |
| D マレーシア | 経済学科1年生 |

E	モンゴル	科目等履修生
		日本語・日本文化研修留学生
F	オーストラリア	特別聴講生
		短期留学プログラム奨学生
G	オーストラリア	特別聴講生
		短期留学プログラム奨学生
H	オーストラリア	特別聴講生
		短期留学プログラム奨学生

授業の進め方

- 第1回 授業目的の説明
授業方法の説明
自己紹介
- 第2回 自国紹介
日本観，日本人観のタスクシート記入
自己紹介作文提出
- 第3回 日本観，日本人観発表
日本の印象発表
- 第4回 日本観，日本人観発表
日本の印象発表
課題提出
「5人の日本人にインタビュー」
留学生の母国に対して日本人がもっているイメージ，どんな事をどれだけ知っているかを聞く。
日本人へのインタビューの仕方説明
日本観，日本人観作文提出
- 第5回 今日日本で話題になっていること，気のついたこと，興味のあることを紹介し，それに対する自分の意見を発表する。
A オートバイ騒音
E 先生の制服
- 第6回 H 日本の社会の上下関係と行動様式
D 水俣訴訟と公害問題
C 環境汚染（フロンガス）
- 第7回 インタビュー結果発表
課題提出，新聞調査
2週間分の新聞を調べ自国のニュースを探す。

どんなニュースが何回でていたか調べる。

第8回 インタビュー結果発表

第9回 日本で話題になっていること発表

B 未来のエネルギー

G 外食

F 社会による女性の身分

インタビューのレポート提出

第10回 新聞調査の結果報告

第11回 新聞調査の結果報告

最終レポート提出

「私の見た日本の社会」

「私の見た日本と自国との関係」等

第12回 新聞調査の結果報告

最終レポートについて

題または何について書くか発表

新聞調査の結果のレポート提出

第13回 休講

第14回 「日本事情Ⅰ」についてのアンケート

「日本事情Ⅰ」を含む高知大学の留学生対象に開講されている授業に対する感想、意見発表

授業に対する感想・意見（原文のまま）

- ① 意見はあまりないですが、ただ日本の歴史の知識がないので日本の歴史の勉強になったらどんなかなあと考えています。
- ② 特に意見がありませんが、もしよろしければ、日本の映画やドラマを皆で見て、それについて自由に話し合うとか、感想文を書いたりするのも面白いでしょう。
- ③ 四月から今まで日本事情Ⅰを取りました。この授業はとてもいい授業です。
みんなと一つのことについて話して、自分の意見を出してとてもいいです。違った意見を聞いた時、自分の知識が増えていきました。日本のことだけではなく、中国とか、オーストラリアとか、モンゴルとか全部分かるようになった。
- ④ 授業がよかったと思います。いろんな日本事情を聞かせていただいたとともにいろいろな国の現状も少しわかるようになりました。自分の気がついた問題の資料をさがすと、レポートを書くところに日本のいろいろな問題についてよく考えました。授業の討論から、各国の人々の立場や考え方などが違っておもしろかった。ちょっとレポートを書くのがきらいだけ

れども、

- ⑤ この授業は私にとって非常にいい勉強になりました。よくレポートを出したり、新聞など調べたり、みんなの持っている興味について学んだりして、いろいろ勉強する方法を使用しました。こんな授業はずっと一年間があったら本当にいいと思います。

なお、平成8年度の授業の成果として、留学生のレポートのいくつかを後に掲載する。

6. まとめ

以上は留学生教育のためのカリキュラムの中にある「日本語・日本事情」の「日本事情」について、「『日本事情』とは何か」、「どうあるべきか」を諸例から確認し、「日本語担当教師にできる『日本事情』を「自分で見つける『日本事情』」として試みた実践報告である。

3回の「自分で見つける『日本事情』」を考察し、一つの形として成り立たせるために常に心しておかなければならないと思われる点をあげる。

- ① 一つの形を作っても、受講学生や受講学生の構成が違えばクラス活動は一様には行かない。言明はできないが、同じ文化圏出身の集まりより異文化集団の方が活動が活発になる。クラスのメンバーの相互活動がクラスを活発にする。
- ② 日本語運用能力の差はクラス活動にはあまり影響を与えない。授業目標、方法、「何をするのか」が理解できていれば、自分の持っている能力で表現できる。問題意識をもって自分の視点で物事を見ることができるかどうかが重要である。
- ③ クラス活動について、目的、方法など説明をして、何のためにするのか理解させるため、十分なオリエンテーションが必要である。
- ④ リーダーをうまく動かす。ボスの存在のリーダーは困る。他のメンバーが萎縮せずに活動できるように意見発表の機会を考慮し、一つの仕事を共同で仕上げる雰囲気をつくる。
- ⑤ 教師は発表者の日本語運用能力を問題にすることなく、出された問題は皆の問題として取り上げ、発表者に自信を持たせる。
- ⑥ 何事に対しても自分の言葉で自分の考えを述べる訓練が留学生にできているかによってクラス運営が左右されるので、経験のない留学生の指導に注意して当たる。
- ⑦ 留学生中心のクラス活動とはいえ、活動をうまく運んだり、まとめるのには教師は相当の裁量が必要である。

一つの試みとして、学習者中心のクラス活動による「日本事情」の授業を行ってみた。

「日本事情」は日本理解のための教科であり、日本の歴史や文化、経済、産業について知識を与えることも「日本事情」になり得るが、日本の社会のなかで異なる文化や習慣がどのように受け止められているか、それを発見するのも日本を理解する一つの方法であろう。そしてそこから相互理解、異文化理解への道がつながるのではないだろうか。このような場に日本人学生の共存という期待をもったのは一度や二度ではない。先に「日本事情はどうあるべきか」、「日本事情をどうとらえるか」について触れたが、今ひとつ内容や方法を追求して、我々日本人も留学生とともに自国の文化、異なる文化を学び、認めあうことのできる「日本事情」教育の可能性を追求するのが今後の課題である。また本稿は試みとしての「自分で見つける『日本事情』」の授業の実践報告に留まったが、さらに授業分析、クラス活動の分析、留学生によって書かれたレポートの詳細な分析を行って新たな研究テーマを見出したい。

注

- 1) 「外国人留学生のための『日本事情』教育のあり方についての基礎的調査・研究」

—大学・短大・高専へのアンケート調査とその報告—

1992年度文部省科学研究補助金研究成果中間報告書

「外国人留学生のための『日本事情』教育のあり方についての基礎的調査・研究」

—「日本事情」教育の現状と課題—

1992・3年度文部省科学研究補助金研究成果報告書

研究代表者：長谷川恒雄 研究分担者：佐々木倫子・砂川裕一・細川英雄

- 2) 上記研究分担者

- 3) 上記研究分担者

- 4) 上記アンケートの質問項目

Q17 「日本事情」教育のあり方および「日本事情」科目の内容について

「日本事情」には多様な解釈と授業形態があります。先生がお考えになる「日本事情」とはどういうことを意味しますか。そして、その理念はどのように現れているのでしょうか。

たとえば、「現代社会、現代日本人をとらえる。日本人の生活習慣、ものの見方など、知らずに身につけてしまった文化を、他の文化との対比のなかでとらえること」という基本理念を持ち、「留学生の目に映る事象を出発点とする。学生からの問題提起、テーマの決定、日本人とのグループ研究」といった講義の方針をもつことも考えられるかと思います。その他、総合講座型、歴史重視型、地域研究型、日本文学重視型、思想・文化・宗教型、異文化行動能力育成型、専門分野知識型、等、さまざまな理念と教育方針があると思われます。先生ご自身のきたんのないご意見、お考えをお聞かせください。

参考文献

1. 長谷川恒雄：1992年度文部省科学研究補助金研究成果中間報告書、外国人留学生のための「日本事情」教育のあり方についての基礎的調査・研究—大学・短大・高専へのアンケート調査とその報告—、「日本事情」研究会（1993）
2. 長谷川恒雄：1992・3年度文部省科学研究補助金研究成果報告書、外国人のための「日本事情」教育のあり方についての基礎的調査・研究、「日本事情」研究会（1994）
3. 細川英雄：日本事情の授業・2—教養部スタッフと協力して—、言語、Vol. 19, No. 10, P. 35—39、大修館（1990）
4. 細川英雄：日本語教師のための—実践「日本事情」入門、大修館（1994）
5. 倉地暁美：中級学習者の日本語日本事情教育におけるグループ研究プロジェクトの試み、日本語教育、66号、P. 48—62（1988）
6. 倉地暁美：学習者の異文化理解についての一考察—日本語・日本事情教育の場合、日本語教育、71号、P. 158—170（1990）
7. 光田明正：日本語教育における日本事情、講座 日本語と日本語教育 第13巻 日本語教育教授法（上）、P. 394—414、明治書院（1991）
8. 水谷修：日本事情とは何か、言語、Vol. 19, No. 10, 大修館（1990）
9. 水谷修・佐々木瑞枝・細川英雄・池田裕 編：日本事情ハンドブック、大修館（1995）
10. 根津清・姜英之・陸培春・クリエンクライ・ラワンクル：アジアの新聞は何をどう伝えているか、ダイヤモンド社（1993）
11. 奥西峻介：日本事情の授業3—日本事情から日本文化へそして……、言語、Vol. 19, No. 10, P. 42—47、大修館（1990）

12. 大濱徹也：日本語教育と日本文化、日本語学3月号、Vol. 11, 明治書院（1992）
13. 小山宣子：日本人学生を交えたディベートによる「日本事情」科目の実践報告、弘前大学教養部「文化紀要」、第四十三号（1996）
14. 佐々木瑞枝：日本事情の授業・1－日本人学生を交えて－、言語、Vol. 19, No.10, P. 28－34、大修館（1992）
15. 砂川裕一：日本語教育能力検定試験と日本事情、言語、Vol. 19, No. 10, p. 48－53
16. 象の会：インタビュー・アジア－アジア・ウォッチングⅡ－、ダイヤモンド社（1989）

資料1

留学生レポート集：「日本の国際化」（原文のまま）

A マレーシア人として見る日本の国際化

日本は本当に国際化できたのだろうか。

この話題に触れる度に多くの人が「日本はたしかに国際化に向かいつつある」というだろう。日本の新聞を開くと、日本人が「国際化」の課題を盛んに論議しているのを見ない日はほとんどないといっていい。政治、経済、教育などの文章から庶民を対象にした商業広告まで日本がすでに「国際化」に入ったことを強調している。日本のように国をあげて「国際化」フィーバーを引き起こし「国際化」に熱中している国は、おそらく世界でも珍しいだろうと思う。しかし、深く見れば日本の「国際化」がおくれていると思う。日本人は言葉の障害や交流不足のせいにしたたり、（日本社会が）単一民族社会によるためだと考えている。言葉の障害で自国または外国人との交流あるいは接触不足は、確かに日本人の「国際化」を妨げる障害となっている。

日本が単一民族社会の特殊性をもっているというのは現在、日本でも普遍的な論調だけではなく、海外でも日本人社会のことがいろいろ報道されている。ブラジルとかハワイとかの報道を見ると日本人はまだ国際時代を否定している。日本人あるいは日本の社会はどこに住んでいようと血のつながりをとても重視するようである。だから南米とかアメリカも含めて、日系人という存在について、向こうに生活している人たちがどういう意識でいるかを極端な場合は別にして、自分たちの仲間だという意識で見がちである。反対の例として在日朝鮮人の場合がある。いまの在日朝鮮人は、ほとんど日本で生まれているが彼らには本国があって、その本国から日本に来ているのだという意識で日本人は見ると、だから、日本の社会の構成員としては扱わない。外国人だから指紋を押すのは当たり前だという。

そういう日本にいる二世、三世を排斥する気持ちと、海外にいる日系人をいつまでも日本人の一部として考える。

在日朝鮮人問題はマレーシア中華人社会と比べてかなり違うと思う。マレーシアの華人は、それぞれの国の国民として生きているから選挙権をもっていないが、政治上の義務と権利をもっている。日本の場合、在日朝鮮人を受け入れない態勢を取ってまだかなり差別的だと思う。日本社会のそういう論理は本当は世界に通じないと思う。世界に通じない論理で世界を理解しようとするのが一つの難しい事と思う。

こういう日本の社会問題、論理行動をつぶさに観察すると、はっきり言えば、日本中が「国際化時代」に入ったと言われる。まさにわれわれ外国人の目から見て、日本の単一民族の特別性は「国際化」の大きな限界が示されている。言い替えれば、日本は国際化の道をまい進するけれども、それと同時に、新たな厚い「壁」を自分のために築くことを片時も忘れていないということであると思う。

B 日本の国際化について

私の意見はこの問題に対して賛成ではないです。ぎゃくによつつぐらいの反対意見をもっています。

日本の国際化が今までどうして上手にならないのか。なぜなら、一番きにするのは日本人の心が本当に狭くあたまがかたいです。じぶんの意見は最後までつづけていき、もしべつによい意見があってもかわりたくな

いです。

むかしからのこっている習慣とかんがえかたも今までもつづけてつがっています。

日本が国際化にはやくりたいので留学生をうけいれることを実行して1983年日本の首相が10万人をうけいれる宣言をはたしたけれども今までもまだ4万人しかいません。なぜならもし日本へ留学したいことになったら、一番頭がいたいのは保証人さんのことです。日本の国はほかの国とくらべてたとえばアメリカとかカナダとかオーストラリア留学したいときは保証人さんがいりませんです。日本の場合はかならず保証人がいるのです。一年間だけではなくてもし大学へいけば保証人さんが保障することは大学を卒業までです。なかなか保証人さんを見つけることができませんでした。日本へ留学の夢やぶれました。以上の場面は私費留学生にたいしてだけです。日本留学のは一年かんまたは一年かん半の日本語をまんで大学を受験するわけです。ふつうの人間だったら絶対そんなみじかい時間では大学に入れないのです。日本に留学の場合は滞在することが一年かんずつ申請しなければならぬです。毎年保証人さんにめいわくをかけて保証人さんの税金証明書とか職業証明書をいただくのです。もし以上の条件不足になった場合は日本に滞在することができません。日本の入官局も留学生にたいしてきびしくてなかなか日本に滞在することができませんでしたが、上のことで日本が10万留学生をうけいれるのは本当のことですか。できるはずがありません。日本の国際化どういふふうになっていますか。口だけのなしですか。実行できますか。日本の国国際化の意味わかっていますか。

毎年の10月17日の留学生の討論会が東京であって今年私の都合がちょうどよいので自分の保証人さんをさそってききにいきます。今年は留学せいを引きうけることがどうなりますか。10月の上旬会でわかるとおもう。

私達は日本へきてどうして「外国人」とよばれておりますか。英語だったら「ALIEN」とよばれております。どうして日本人どんなことばをつけておりますか。私たちとあなたたち(日本人)おなじ人間ではないか。私たちは地球の外にすんでいる人間ですか。日本人は外国からきたの人がきらいですか。それとも私達にきらいですか。私たちを差別しているのではありませんか。

もっとわらうとおかしのことがありました。日本人は外国へいっておおくのひろい土地をかって、うちとかマンションをたてます。でもこの地域は日本人しかはいれぬです。どういふことですか。その国に来るのになぜその国の事理解しないですか。日本人は自分の利益のためになんでもやるでしょう。ほかの人のことぜんぜんかんがえぬです。その国の人どうかんがえるですか。日本人が自分の国にきて土地かってそういふこととして私の心の中はかなしくてさみしいです。いやです。日本をきらいです。でも、日本人の場合そんなことかんがえておりません。

日本の国際化なれますか。出来るはずがないです。

最後に私のおねがいです。日本の人まず言葉の勉強してたくさんひとびとが外国に旅行してその国の実状をまんでもらいたいとおもいます。その理解のうえで国際化といえるのではないのでしょうか。

C 日本の国際化

明治時代から帝国主義的な活動してきた日本は第二次世界大戦でやっと敗戦して、長い戦争の時代も終りを告げた。一九四五年八月十五日の無条件降伏後の時代を戦後という。

まず、一九四五年から一九五二年まで連合軍総司令部は日本を支配し、その間に、戦後改革を行った。非核軍事化、民主化、教育の自由化などの変化は次々行われ、一九四六年に天皇が「人間宣言」を行い、神格を否定し、明日の日本への最後の一挙を与えた。原稿が英語で書かれた新しい日本国憲法は一九四七年五月三日むりやりに施行された。

五十年代のころから日本経済の高度成長の時代が始まり、日本は国際的に重要な経済大国になってきた。現在、日本は経済的な面から見ると、世界一の文明化された国であると言えるかもしれない。しかし、日本は、今の日本になる途中で自分のアイデンティティーを無くしてしまったようである。戦前の国家主義をやめさせたため、日本とは一体何か、日本人とは誰であるかを、外国人はもちろん、日本人ですら、理解できなくなってしまったと思う。相互依存関係がますます深くなる現在の国際社会の中で、「国際化をしよう。」としている国は日本しかないと思う。

「国際化って、一体何ですか。」と日本人に尋ねても、返事はあまり来ない。「外国をマネする。」や「外国についての知識」という返事だけである。なぜ国際化であるのに、日本人の意識は、外国人は皆金髪で、目が

青く、英語しか話せなくて、日本食を食べられない人間というのであろうか。なぜ、「国際化」なのに、勉強のために日本へ来た（白人）の留学生は見せ物にされてばかりで、同時に大学のキャンパスの中でも一般の学生の一人になれないのであろうか。それから、なぜ、来日している外国人は毎日「日本で困った事」や「日本はどういう風にかわるべきか」について聞かれるのであろうか。（つまり、なぜ私は「日本の国際化」についてレポートをかかなければならないのか。）私がここで言いたいのは、国際化とは討論や研究される事ではなくて、第一に、スル事である。

日本で、「たてまえ」と「ほんね」の考え方があるというのはよく知られている。

国際化に対して、今まではたてまえの事だけだったのではないだろうか。国際化の問題は、「外国」という言葉と深く関係があると思う。日本は、「内の国」として、他の国を全部、区別せずに、「外の国」としてみているようである。私にとって、その言葉は廃止すべきだと思う。他国を一つずつ知り、また、理解し、受け入れた後、「国際化」の本当の意味がわかるようになると思う。私の日本人の友達ほとんど皆「国際的」な人間である。しかし、彼らは、「国際化」や「国際交流」という言葉を使わない。そういうような人間は日本では、まだとても少なく、本当に残念だと思う。彼らが例外である間は、「日本の国際化」という言葉は無意味である。

現在、国際社会は発展している間には、日本はいつまでも、一つだけの本物の「外国」であり続けていて良いのだろうか。

D 日本の国際化

今、日本では、「国際化」という言葉が非常に流行していて、東京や大阪などのような大都市だけではなく、私が住んでいる中心から少し遠く、静かな高知でも、時々耳にします。ところが、「国際化」というのは、いったい何の事でしょうか。私にははっきりと分かりません。

私が日本にきてから、日本の国際化についてまず目に止まるのは、各国から日本にきた留学生の数の多いことです。これからも、留学生がだんだん増えていく傾向がありますが、各国から来た留学生たちは、日本人と一緒にお互いに、文化などの交流をして、お互いに理解して、お互いに助けるようになってほんとうに素晴らしいことだと思っています。

ところが、私が日本で実際に感じたことは日本人が外来語を、多く使うことです。つまり、物事でも、品物でも現す場合に、日本語の中で、ちゃんとその言葉があるのに、それを使わずに、わざわざ同じ意味を持つ外来語を使うわけです。これは、私にとって、長い間、不思議な、びっくりしたことです。いま考えてみると、これも日本の国際化のひとつの面ではないでしょうか。自分が外国のことを、よく知っていると云えましょう。日本がこんなに外来語を使うのは、悪いこととは言えません。けれども、私は賛成しません。なぜなら、日本文化は優れた文化で、そこから、日本の特性が見られるからです。もちろん、日本の文字のほとんどが、昔中国から採り入れたのですが、いま使っている文字の中では、日本人自身で作った文字も大分あります。例えば、「働」という文字は、分けてみれば、人が動くという意味で、ほんとうに、日本人の勤勉的な性質を、よく表現するようになります。日本の取り柄だと思っています。したがって、外国のことをマネしたり、外来語を使いすぎたりすることは国際化だとは思いません。

私の考えでは、日本の国際化とは、まず、日本として、それぞれの国のことを知ることです。次は、反対に日本のことも外国人に知るようにすることです。つまり、お互いに異なる伝統文化や、生活様子や、風俗習慣などを知ることです。これは、国際化としてのもっとも基礎的なものだと思います。それから、お互いにさまざまな価値観を認め合うことが必要です。日本人の価値観と尺度で他国の行動を測ることはできません。地球上には五十余億の人が住んでいて、五十余億の価値観があっても、不思議ではなく、この現実を直視するべきです。これは、日本の国際化の第一歩だけではなく、国際交流の出発点ともなります。まず、相手にも独自の価値観のあることを認めて初めて、国際化の進むことができます。そのうえ、留学生フォーラムがふえるならば、日本に滞在する留学生にとっては、日本社会といっそう融合が出来て、日本人にとっては、異文化を理解して、日本の国際化を促進することになります。

E 日本の国際化

日本の国際化について、日本の新聞やテレビなどマスコミは、いろいろな話題がありました。留学生の為の日本語のテキストの中でも日本の国際化について言葉もたくさん書いてある。しかし、同じクラスの留学生は、日本の国際化の具体的な内容が、あまりわからなさそうです。

実際は、日本の国際化の表現が、日常生活の中で、よく見えると思います。着物、食事、住み、旅、文字、宗教だけではなく、外国とのお互いの文化、経済及び軍事面の交流と協力だと思います。以下、自分の皮相な見解を分別して述べたいです。

文化交流の国際化。去年日本の文部省の統計によると、いまはほんに在籍の各国から来た留学生が、四万人くらい居り、文化交流を進める為、日本政府は、もっと多くの留学生受け取るつもりだそうでした。日本政府と民間団体と個人は、できるだけ留学生をいろいろ支援してくれます。いろいろな国際交流のパーティー、スピーチ大会など招きで、留学生を招待していました。外国の留学生との交流を通じて、国々と相互理解を深め、友好親善を求めます。しかし、日本の一部分国民が、国際化の意味を理解しなかった。例えば、ある人が「日本の国土が狭いけど、多くの外人に来て、たいへんですね」と言いました。東京にいるある不動産屋さんは、留学生に和式の部屋をすませないそうでした。理由は、留学生の生活習慣も違うし、部屋もきたなく易いし、夜も遅くまで寝るから、煩いだそうでした。私は東京にいた時、ある日に高田馬場の労働市場に行って、アルバイトを探した時、雇主さんは「外人を雇わない」と言った。非法就労者に対して、雇わない理由があるが、留学生は休みを利用して、アルバイトをやる。たいへんですけど、皆同じように雇わなければ、国費留学生は大丈夫だかも知れない、私費留学生は、ほんとうに困ると思います。やはりアルバイトは、ほとんど肉体と簡単な仕事ですよ。しゃべる仕事ではない。そのようなことを見ると、徳川時代の鎖国の風は、まだ残っていると思います。

経済面の国際化。日本の国土は狭く、鉱物資源も少なく、労働者の給料がどんどん増えて、労働力も不足になるそうです。少なくない財団と企業は、日本で卒業した留学生を雇う。一方、海外へ行って、工場などを建ててやります。あるいは、経済投資を海外へ移転します。一部分財団は、投資した国の留学生を支援して、友好感情を求めて、海外企業の代弁者を育てることもあるでしょう。

軍事面の国際化。日本の国民は、悲惨な戦争を深く反省し、再び戦争の為の武器はとらないことを強く誓い合いました。ですから例えば、湾岸戦争時、日本政府の派兵提案が、廃案になった。

最近、日本の政府は、新しい国際形勢に面して、もう一回海外派兵の提案を差し出した。日本政府は「国際に経済の協力をやるだけではなくて、ひとの面も国際社会に協力したい」そう言うふうの要望を発表しました。たとえば、国連平和維持活動など、もちろんこの提案は、自衛隊を海外へ派遣することです。これは敏感な問題ですが、本当に平和と人道の為、それもいい考えでしょう。今後、自衛隊を派遣することを通じて、日本軍隊の姿を良く変化します。

F 日本の国際化について

国際化とはどういう意味でしょうか。私の思っていることは、一つの国が他の全世界ともっといい関係を作るために、その他の国々についていろいろな伝統と考え方を輸入することだと思います。そして、その他の国々の伝統を真似することではなく、一つの国の人々が他の国と親しくなろうとすることです。それで、本当の国際化の一番大事なことは、世界の他の国々と仲よくすることです。本当は、私は文句を言いたくない、失礼もしたくないので、注意をします。でも、私は少し提案がありますから、言います。江戸時代、日本は鎖国することになりました。そして、その体制は二百年ぐらいを続けました。その二百年の間には、日本の国内が仲よくする感じになりましたが、国際関係を作ることがほとんどありませんでした。ですから、多分その時代から日本人の考え方が「日本は島国だから、他の国との関係はあまり欲しくない」となったのでしょうか。鎖国の時、日本は中国とオランダだけとしか貿易しませんでした。ですから、鎖国が終わってから、たくさんの西洋人が日本に来て、皆は「オランダ人」とよばれてしまいました。このことは、ちょっと現在のことと似ています。ほとんど、現在の日本人が西洋人に会えば、すぐ「アメリカ人」とよびます。それで、カナダ人やイギリス人とオーストラリア人などがちょっと怒るみたいです。日本の歴史の中で、日本は戦争したことがたくさんありました。昔から、日本と中国の間や日本と朝鮮の間で戦争がよくありました。日本は勝っても、負け

ても、その二つの国と仲が少し悪くなりました。今日でも、お年寄りの人は悪い思い出をまだ持っているみたいです。もちろん、今まで日本は中国や朝鮮と講和条約を結んだので、現在の関係の方がいいと思います。でも、それなのに、どうして日本にいる中国人が差別されているのでしょうか。逆に、中国にいる日本人も差別されているでしょう。ですから、も一度日本の国際化について、ちょっと言いたいことがあります。日本にはすばらしいことが多いと思います。たくさん親切な人々もいますが、全国的に見れば、まだそうでない人が多いと思います。たとえば、戦争の時、日本はひどいことをしたことがあります。他の国もありますけれど、今まで日本は悪かったと反省していません。ですから、他の国に怒られています。もし日本は自分の国のせいを反省すれば、多分他の国に許してくれると思います。でも、日本は自分の国の罪を反省しないと、中国や朝鮮と仲がよくならにでしょう。そして、現在の日本人はほとんど、外国人に慣れていないみたいです。今日、たくさん外国人が日本にすんでいるでしょう。そして、普通の日本人の考え方は、東洋の外国人「アジア人」より西洋の外国人「白人」の方がすきみたいです。多分理由は、東洋人の容姿は日本人によく似ているので、東洋人はめずらしい者ではありません。でも、西洋人の容姿は、ほとんど日本とまったく違うから、西洋の方が面白いと思っている日本人が多いでしょう。私達の西洋人は見せ物ではなく、ただ日本人や中国人などと同じ人間です。私達の日本にいる外国人も気持ちがあることを覚えて欲しいです。現在の日本と鎖国の日本を比べたら、もちろん、現在の日本の方が国際化するようになっています。でも、現在の日本はまだ百パーセント国際化していないと思います。それで、日本がもっと国際化するようになるために、日本にいる外国人ともっと仲よくなる関係を作らなければならないと思います。ですから、これが日本人へのメッセージです。私達の外国人は日本語ができないと思わないで下さい。普通の日本に住んでいる外国人は十分日本語ができるので、「ハロー」などの失礼なことを言わないで下さい。私達にも「外人」とよばないで下さい。私達は心がある人間だということを覚えて下さい。中国人と他の東洋人は目下の者と思わないで下さい。私達の外国人を愛して下さい。私達も日本人を愛しているからです。現在、たくさんの親切な日本人がいます。もしそのような人々が増えたら、皆にうつして、日本が本当の国際化をするようになれる。私はその日まで一生懸命を祈っています。

G 「日本と国際化」

約1〜2万年前に日本はアジア大陸から離れました。その時から法治国家になるために日本は国際化しました。

日本の最初の外国との関係は中国と朝鮮でした。そして、四世紀に入ると日本と朝鮮との交流の記録が現れました。中国と朝鮮以外の地域の文化も日本に伝達しました。

1543年にヨーロッパ人と日本人が初めて実際に接触しました。その都市から1639年までポルトガル人やスペイン人やイギリス人やオランダ人などが相次いで日本にきてカトリックの布教や貿易を行いました。

2百年間の孤立した生活をしてから、日本人はまだ国際化しなかったのです。1869年から、明治天皇の新しい政治は近代化のために国際化の計画に乗り出しました。日本から多ぜいの人が勉強のために行きました。そして、多ぜいのヨーロッパ人やアメリカ人が日本に来て文化を伝達しました。1881年から1898年まで10,517人の外国人の先生や技術者を招きました。

今日まで明治の国際化の考えがまだあります。たとえば、「JET・プログラム」という国際化の計画があります。毎年英語を教えているために多ぜい外国の教師は日本へ来ます。JETプログラムの外に日本の外交や経済協力や技術協力やいろいろな文化交流などがあります。それで、日本の歴史を勉強するのは日本の国際化の歴史なのです。

今日、日本の国際化を日本の生活に移しているのはどうでしょうか。私は日本の国際化について生活にしていけないと思います。私は日本の国際化とは西欧化だけにほかならないと思います。日本の国際化とアジア化は同じではありません。たとえば、すべての学校でアジア語を勉強ができなくてもその外国語は日本の一番近い国の言語です。けれども、すべての学校で西欧語を勉強ができます。特に英語は日本の学校で6年間も勉強しなければなりません。私の個人的な経験より、高知大学でアジア語を勉強できなくて、西欧留学生はいつも特別なパーティに招くけれど、アジアの留学生はあまり招きません。

日本の国際化について他の問題があります。私は日本の国際化が日本の生活により影響をおよぼさないと思っています。日本では外の言語と考えをしきりに使います。けれども、外国人と外国は他国のし方を認めません。

たとえば、日本国民になるのは日本の相続財産人だけができます。外国には多民族の政策があります。外国人のし方を信じません。たとえば、「The Japan Times」という新聞によると、外の政治家は英語を話せる日本の政治家を全く信用していません。

一般的に言えば、日本人は外国へ旅行すると、外国の文化に興味をもっていません。オーストラリアに日本人の観光客はふつう日本のホテルや日本のレストランや日本の店へいきます。それは大きい問題です。

かつては日本の国際化が始まったために、今日、まだ問題があります。その問題の解決法を見つけるのは日本人です。日本人は外国人と外国人の他国のし方を完全に信用していると、日本の国際化は日本の生活を助けません。

H 「日本人と国際化」

ブラジルでよく雑誌やテレビなどで、日本は昔と違って、現在は国際化された国だと書かれていたり、ニュースになっていたりした。

その国際化というのは、日本が色々な国の人々の観光客、外国の先生、留学生、労働者を受けて外国の文化、料理、言語の知識を交流しながら広めていることを意味していた。でも、日本へ来て五ヶ月になるが、ブラジル人としては、日本は、まだまだ「国際化された国」とは言えないと思う。

日本は毎日のようにニュースで国際化、又は国際交流と言う言葉がよく使用され、いつも外国人がいるイベントやパーティーが行われると国際化と言うテーマが入ってしまうこともよくある。ずいぶん無理をして、短い期間に日本人と外国人の交流をしたがっているようだ。

だが、よく見ているとそう言うイベントでは外国人どおしの交流は見られるが、日本人と外国人の交流はめずらしいと言える。

第二次世界大戦までは、日本はそんなに外国と交流していなかったことに比べると今はずいぶん国際交流されているかもしれないが、それは急に出来ることではない。

日本人々は時間にしばられて、どんなことにしても、ゆっくりすることや、待つことや、めんどくさいことは、もう出来ないようになっていっているようで、人間関係に対して、日本人は慣れてなく、まるで、物を買うようにお金で国際化しようとしているようだ。

例えば、最近、自分の両親が年をとってくると、子供さん達は病院へ入院して、かんごふさんにお金を払ってめんどくさいを見てもらうようにしている。だから、日本人は自分の両親の付き合いまで、お金で終らせている位なので、他人との付き合いは無理では無いだろうか。

先月、名古屋で国際化として、留学生との交流が有り、日本全国の留学生を集めて大金額を使って色々なイベントが行われた。

私達、留学生としては、楽しくて、勉強にもなり、外国（アメリカ、中国、韓国、メキシコなど）の友達がたくさん出来たが、こう言う時こそ日本人の人々も一緒に参加していれば、日本での国際化になるのではないだろうか。

その名古屋のイベントでは、新聞記者もテレビやラジオの放送スタッフもいたが残念ながら日本の学生は参加していなかった。

日本の学生は家で新聞を読んだり、クーラーのある部屋でテレビのニュースを聞いたりする方が楽だからだろうか。それとも日本人は外国人にとって恥ずかしいのだろうか。そう言うことだったら、私達、外国人が自分の国にいないので恥ずかしいはずだ。

文化や人間の国際化は、品物の貿易とは違って、何よりも人間の付き合いも、時間も必要だ。これだけはお金で買えるものでは無く、自分の肌で得ることが一番だと最近思うようになった。

ブラジル留学生として、又は、色々な国籍の人やその子供がいる国の人として、国際化は自然な傾向であると思う。だからそんなに急に出来ることではない。

それに国際化するには地元の人々がその気にならなければ、政府が色々してもむだになるようだ。

名古屋のイベントで、現在の日本はもう品物の時代では無く、又は、物を買集める時代では無く、サービスの時代になっていると言われていた。そのとおり日本人は外国のことはテレビ、映画、観光などをしてお金を払って得ることもなくなってしまっているようだ。だから、実際は日本はまだ国際化されている国では無く、それに最近、とても急いではたがっているが、日本人が外国人との交流をスーパーなどで品物のように得る

気持ちでいるかぎりには国際化するのも無理ではないだろうか。

私にとって、外国人との交流をしていくには、日本人も恥ずかしいという気持ちをすてて、外国人とのイベントやパーティがあれば、それに参加すれば、私達にも外国人としてもっと日本のことが分かるし、外国のことも話が出来るとし、国際化のための交流が出来ると思う。

資料2

学生A

「自己紹介」

私はエリス アズワン ビン デラマンです。東南アジアにある国マレーシアから来ました。私の兄弟は6人います。私は長男です。どうして私が日本へ留学したかという点まず日本語を勉強したいし、日本の文化をくわしく知りたい日本の経済を勉強したいからです。私の趣味はあまりないのですが、暇な時に時々私は散歩して友達と映画を見たり、いろいろなことを話したりします。

今、私は高知大学の経済学科に入り、これから4年間勉強します。日本の大学に入る前にマレーシアで2年間日本語を勉強しました。高校卒業後に私はマラヤ大学であるコースをとりました。このコースは日本留学特別コースと言います。マレーシア政府はルックイースト (Dasar Pandang Ke Timur) なる政策目標を立て日本や韓国を手本に国を発展させようとしています。マラヤ大学では一年生はほとんど授業はマレー語で教えてもらいます。二年生になったら英語以外は全部授業は日本語で教えてもらいます。

マレーシアは発展途上国です。現代マレーシアの経済は活発に発展しつつあります。マレーシアの国は大きな国ではなく、日本と同じぐらいの広さだと思います。マレーシアは多民族国家なのでいろいろな民族がいます。一番たくさん民族はマレー系で、次は中国系、その他インド系や小さな民族がいます。マレーシアは戦争とか民族と民族のけんかがないので安全な国です。マレーシアの首相はマハディール首相です。首相は選挙で選んで4年間ずつ選挙を行います。

マレーシアはきれいな観光地がたくさんあって毎年たくさん観光客が来ます。マレーシアでは熱帯の果物がいっぱいあってとてもおいしいです。一番有名なのはドリアンです。

食べ物もそうです。以上私と私の国の話です。

「日本のイメージ」

私は日本へ来る前に日本はすごい国、近代的なビルが全国にたてられて、みんなモダンな生活をやるイメージを持っていました。こどもの頃は日本のイメージが忍者とさむらいのイメージを持っていました。なぜかというと私はその頃日本の忍者の映画がとても好きだからです。その影響で日本のイメージもそのようになりました。

そして、日本人のイメージはみんなきんべんな人とよく働きすぎる人なんです。外国へよく旅行するのはほとんど日本人がお金持ちだと思います。私にとって日本のイメージがだいたいいいイメージです。年をとった人は日本と日本人のイメージが悪いイメージを持っている人もいます。それは第2次世界大戦の時、日本の侵入のために民族がおそろしい生活になりました。今でも、老人に聞いて日本に対して「Penampar Jepun」日本のパンチという意味のイメージを思い出す人はまだいます。

マレーシアでは一般の人達が持っている日本観は日本が近代的な国、全員の日本人は勤勉な人、よく働く人です。私には日本と言えばおじぎと桜と近代的な国を思い浮かべます。そして日本人と言えば勤勉な人とはよく歩くことを思い浮かべます。マレーシアは電気製品が大部分は Made in Japan という言葉が書いてあるのでみんな日本に対して近代的国で見ます。

一般の人達は日本のことはテレビとざっしで知ります。テレビで日本の国についてよく放送しています。ときどき日本の映画とドラマも放送します。有名な番組は“The Profile of Japan”。日本とくらべてマレーシアに大きな影響をする国は米欧州のほうが大きいです。

「マレーシアのイメージ」

先週私は4日本人をインタビューしました。インタビューは、マレーシアにたいして何かイメージが思ったことです。インタビューする前に質問を準備しました。

私にインタビューされた人の中では一人一人の答がぜんぜん違います。2人は、高知大学生に聞きました。かれらはマレーシアのことは名前と東南アジアにある国ということだけ知っています。マレーシアと言えば、かれらはマレーシアはあたたかい国と食物が辛い、スパイスがいっぱいある、きれいな農業の国、おもしろそうな国を思い浮かべました。

そして、私の家の近くに住んでいる人を2人にインタビューしました。その2人の女の人の仕事は主婦と看護婦です。かれらは、マレーシアのイメージにたいして、あついで家族が大きい、よくはたらく人だと思っていました。その2人、マレーシアは名前だけ知っています。どこにあるか知らなかった。最初はマレーシアはヨーロッパにあるのだと思いました。かれらは旅行の本によってマレーシアのことを知りました。

私はインタビューの後、少し考えます。日本人はマレーシアのことをあまり知らなかったと思います。そして、なぜ日本人はマレーシアのことがあまり知らない。一生懸命考えても答えがなかなか来なかった。たぶんマレーシアは人気かない。でも、今日世界は東南アジアに目を引いています。そこにたくさん日本の会社が作られた。

本当に言って、私は心の中にちょっとがっかりしました。どうしてかというとみんな私の国をあまり知らなかった。

「新聞について」

私は2週間ぐらい、図書館でいろいろの新聞の種類を調べました。調べた範囲はマレーシアについて何かでたことです。新聞の名は高知新聞、朝日新聞、The Japan Timesなどを調べてみました。

でも残念ながら、日本の新聞にマレーシアのことがあまり出ていませんでした。日本以外はアメリカと中国の話がよくありました。2週間ぐらいで、マレーシアの書いていたことは2つだけありました。一つは「Malaysia to Free Thai Prisoners」、6月3日にThe Japan Timesに出てきました。その内容はマレーシア政府はタイの受刑者を自由させたことです。なぜかという、その時はタイの王様の誕生日なので、今まで両方の深い関係を守ることが必要だからです。マレーシアはタイと歴史的に昔からずっとあります。

二つ目の記事は「マラヤ大学生が関西創価学園を訪問」ということです。その機会です学園生活やマレーシアでの生活など、楽しみに話しました。従って友情のきずなを結んだ若き友の国際交流は新世紀へと大きく広がります。その記事は6月5日にThe Seikyo Shimbunから取ってくれました。

ずっと日本新聞を見て、マレーシアは日本に対してあまり気にしないと思います。日本はアメリカへ非常に向きました。新聞のなかに国際ニュースの分部は少ないと思います。マレーシアは日本との関係は経済的とか文化的とかアメリカのような関係ではないのでマレーシアのことが日本新聞にあまりなかったということがわかりました。

「私が日本に感じたこと」

私は日本に来てもう4カ月間になります。今、本当に時間は待っていてはくれなことを感じます。いろいろなことを経験しながら重要な時を過ごす毎日充実しているのでよけいにそう感じるのかもしれませんが。

地元を離れ、1人で生活するのは初めてで、不安なこともどんどん増えてきます。来日をする前から日本という国、日本人に対するイメージは先生やテレビやざっしなどで聞いたり読んだりしていたので、ある程度想像はついていました。

私が日本へ留学する目的というのは勉強するだけでなく日本人の生活の中に入り、交流を深めることです。日本に来て、最初の日はとてもさびしくて、地元へ帰る気持ちが強かった。どうしてかという他の人がぜんぜんわからないし自分が世界に一人で住んでいることを感じました。その上、勉強の面では漢字や言葉の意味がむずかしく、毎日が小さい新和英中辞典とのにらめっこでした。今でも辞書は私の友達になります。

日本では、どこのスーパーマーケットやデパートなど、客相手に仕事をしている所に行くと、親切に声をかけてくれ、気持ちよく接してくれる。サービスを第一とした仕事、いわゆるサービス業は客になると気持ちがいいもので、なんとなく、またこの店に来ようなどと思ってしまう。マレーシアでもそのことがあるけれども少ないです。

日本での生活状況というのは、私の国からするととても便利でぜいたくなものだと思います。なぜならば、仕事さえすれば生活はできるし、またその生活の中でも必要な物事は簡単に手に入れることができるからです。

日本は近代的国だ。経済力を持ったので全国は高いビルが建って、ハイ・テックを使って生活をする。森や自然がもうなくなった国だと思います。現実には日本に来て思ったとおりではありませんでした。うつくしい森やきれいな川や自然などまだ守られています。

日本人は誰でも時間を非常に守っています。みんな時間にとって仕事をして予ていをたてました。私は日本に来てそのことがだんだん慣れるようになりました。電車とバスはいつも時間通りに走っているので、時間のむだ使いは避けられます。従って日本に来てから感じたのは清潔な環境と便利な交通でした。町中にはほとんどごみがありません。ごみは日によって捨てる期間とごみの種類と決めます。私の国と比較してみると、マレーシアでは日本ほどそのことがまったくありません。

もう一つ感じたのは日本人の動き方です。日本の顔と中国の顔が似ていて区別することがなかなかできない。でも動き方をみると、区別することができます。

日本に来ていろいろなことを感じしますのにまだまだ不十分ではないと思います。今からもっと日本人と日本の文化を知りたいです。

学生B

「モンゴル文字の復活」

モンゴルがロシアの影響を広く受け入れたのは1921年である。七十年間続いた社会主義になったのも当時のことであり、社会が変わるにつれて、文化にも、いわゆる、言葉の文化に大きな変化が現われた。それは、昔から使われてきた縦書きのモンゴル文字がソ連の横書きのキリル文字に変わったことだった。その時からモンゴル語のことは「キリル文字のモンゴル語」と言われるようになったのだ。

ソ連からキリル文字とロシア語を教える人々がどんどんモンゴルに入ってきて、総ての学校で一気に教え始めた結果、モンゴル人は新しい文字を覚えるのが意外と速かった。ただし、いつまでも誇るべき本当のモンゴル文字を全く忘れてしまったのだ。でも、ロシア語とキリル文字こそ、モンゴル人が世界を見る窓となったと、モンゴルの人々はいまだに考え、感心している。

1990年の民主化とともにモンゴル文字の復活が決まった。だが、実際にモンゴル文字を読み書きできるのは人口の約一割にすぎない。他はまだキリル文字を使用している。1992年から小学校と中学校の授業の大部分がモンゴル文字で行なわれている。また、94年から16歳から50歳の国民にも習得を義務付けたが、三十代後半の人及びお年寄りはいまにも難しいと言って、もう諦めているのが事実であろう。

モンゴル人が、元の文字を生き返らせようとする気持ちは強いが、経済混乱が長く続くにつれて、モンゴル文字への意識がだんだん弱まってきて、反対運動まで起こった。理由は、モンゴル文字はもちろん、キリル文字も文化であり、キリル文字のおかげで、モンゴルでは読み書きできない人がいなかったのだと言うことだった。モンゴル文字の復活にはこれからも費用と努力がいるが、モンゴルの人々は二つの文字の共存を主張している。

「日本のイメージ」

私は日本という国について初めて知ったのは小学校の時である。当時、親戚のおじさんが出張で日本に行くことになり、帰りには私にぬいぐるみのパンダを買ってきてくれた。私にとって最高のプレゼントだったそのパンダを可愛がっているうちに「こんな可愛いおもちゃを作る日本というのは一体どんな国なのだろう」という子供の好奇心が心の中に生まれたのだ。その好奇心こそ、高校の時、第二外国語として、日本語を勉強し始

める切っ掛けとなったと今は思われる。

私は高校二年の時、初めて来日することができた。日本に来る前は日本について三つのイメージを持っていた。最初は、日本人が毎日着物を着て、げたをはいて、扇子や刀を持ち歩いていると思っていた。でも、中学校三年生に先生が日本のことを教えてくれたので、このイメージはがらっと変わった。それは、ファミコンやコンピューターがいっぱいの日本だ。例えば、声でスイッチを入れたり、なんでも声でできる。でも、日本に留学するのが分かってから友達や家族の考えを聞いたり、本を読んだり、日本の映画を見たりして、上下関係があって、女性が家事をして、男性は外で働くというイメージになり、コンピューターのイメージがだんだん少なくなった。そして、そのイメージを持って、私は日本にきた。

日本といえば、富士山、着物、島国などいろいろなものを思い浮かべる。また、春といえば桜、夏といえば梅雨、秋といえば紅葉、冬といえば温泉だ。日本人という、頑張り屋で恥ずかしがり屋の性格が何よりも先に考えられる。日本人は仕事が上手だが、遊ぶのも上手だということを日本に来てから分かった。それは決して悪いことではなく、かえって良いことだと思う。結局、人生というのは、なるべく楽しんでやるものだという今の日本の若者の考え方と私の考え方は一緒である。

「モンゴルについて日本人のイメージ」

初めて会う日本人に自分のことを紹介すると、よく「遠いところから来ていますね」と言われる。いつも、モンゴルと日本はそんなに遠くないのに、と思っていたが、それが、距離的にではなくイメージ的に言っていることだと、つい最近分かった。

では、日本人はモンゴルという国についてどんなイメージを持っているのか、何人かの人に聞いてみた。その人達の中に、モンゴルのことを大部分知っている方もいたが、やはり、全然知識がない、地理的にも知らない、という方もいたのだ。また、「今まで知らなかったが、この間の大火事で知った」と言う人も出た。

大体の日本人が、モンゴルのことで、二つか三つのイメージを持っている。それが、まず、モンゴルは大草原の国だ、と言い出す。このイメージを、日本人が、テレビの番組から持っていると思う。九十年以来、日本とモンゴルの関係が前よりもっと盛んになった。そのお陰で、私の国のことは、日本のテレビで放送されるようになった。あまり知られてない国について放送するには、まず、その国の特徴を見せるに違いない。それで、日本の人々は、モンゴルは大草原の国だとか、人間と馬の関係とか、モンゴル人の住居や習慣などを少しづつ知り始めたと考えられる。

二つ目のイメージは、モンゴルはチンギスハーンの国だ、というイメージだ。確かに、これは強いイメージである。十三世紀のチンギスハーンの時代は世界中で有名だから、チンギスハーンのことを知らない人は、世界史を勉強していない人々以外に、あまりいないだろう。しかし、チンギスハーンは元々中国人なのだとか、日本人がモンゴルに行ってチンギスハーンになったのだなど、いろいろな説があるが、チンギスハーンは元々モンゴル人で、いつまでもモンゴルを代表する一人の英雄であるとは私は思っている。

「新聞記事」

モンゴルについて情報を調べるためには、日本の朝日新聞と日本経済という二つの新聞を主にした。他の国と比べれば、私の国のことを書いている記事があまりなかったが、文化や経済欄の方では、多少出ていた、それを参考にしながら、このレポートを書きたいと思っている。

この春の2月から5月にかけて、およそ3カ月間ぐらい、モンゴルでは草原の大火災があった。その火事はモンゴル民族にとって、非常に大きな損害を与えたのだ。火事について詳しいことはテレビのニュースでよく放送していたが、6月3日と17日の朝日新聞にも載っていた。タバコの火が原因になった火事がますます広がり、モンゴルの西南の方で北海道の面積とほぼ同じぐらいの所が燃えてしまったということである。それと、国境を越えて、中国の北の方も少し燃えたという。幸いに、モンゴルの人口は少ないからか、そんな大きな火災にしても死亡した人はわりと少数だった。記事によると、大体17~20人であるそうだが、けれども、焼けたりして怪我した人が結構多かったということだ。しかし、タバコの火のため、どうしてそんな大火災になるのかと考えてみると、そこでモンゴルの気候や風土の所為もあったに違いないと思われる。モンゴルの春は

あまり雨が降らないので、ずっと前から空気が大変乾燥していたということで、火事になりやすいのである。他方、風が強いからもし火事になったら直ぐに激しくなり、どんどん広がるという点もある。また、人が少ないので、なかなか力が弱かったし、消防車が入れないところもあったそうだ。結局、草原の火事が自然で消えたが、もうちょっと早く消えたら、そんな大損害にはならなかったかもしれないという残念な気持ちがある。しかし、日本及びいろいろな国がモンゴルに助力してくれていること、モンゴル民族の一人として、大変有難く思うのだ。

もう一つの記事は火事の記事と違って、うれしいことを報告したニュースだった。6月13日の日本経済新聞に出ていた「モンゴル身近に」という題の記事なのだ。記事の真中に「大草原を馬でかけるモンゴルの遊牧民」と書いて、写真が載っていた。主にどういう内容かという、モンゴル航空（東京）は4月27日、関西国際空港からモンゴルの首都ウランバートル行き初の直行便を就航させたとのことである。これは、両国の関係がますます良くなっていることの証拠であると考え、喜んでいる。今までモンゴルから日本へ行くために、あるいは、日本からモンゴルへ行くためには必ず北京を通して、乗換えていくしかなかったのだ。しかし、これからは直接いけるということは非常に便利で、せめて私みたいな学生や観光客にとって、大変うれしいこととなっただろう。また、今年は10月末まで週一便の運航だが、来年は年間を通して週二便を飛ばすそうだ。それに合わせて「遊牧民との触れ合い」をキャッチフレーズに、ツアに力を入れ始めている旅行代理店もできたらいい。そうすると、モンゴルへ向かう日本人の観光客もどんどん増えるに違いないと思う。

直行便のおかげで、同じアジアにありながら、あまり知られていなかった「近くて遠い国—モンゴル」が少しずつ日本人の身近に感じられるようになってくるだろう。

「日本人の方言」

方言とは一体何だろう。その実体はいかに、どんな理法が働いているのか。世の中の人々の多くは、方言と標準語を使い分けて生活している。が、その方言を使って生活する経験を持っている人々の感情、例えば自分の言いたいことを方言で表す場合に非常にぴったりしていることについての喜びとか、標準語を話さなければならない時の不自由さとか、あるいは方言を使って他人に理解してもらえない場合の悲しみとかいうような、言葉を使う上での喜びとか悲しみ、つまり方言の心といったものがあるのだ。

一般的には、方言とは、言語の地域的な変種をさしあrawす概念である。日本列島の各地で使われている、地方によって少しずつ違った日本語は、日本語の方言である。また、こういう日本語の方言は、日本列島で日本語が使われ始めて、広まっていく過程で生まれ、発展して、日本人がこの列島の中であゆんだ歴史のあゆみに呼応しながら、互いに影響し合い、いりまじりあいながら複雑な過程をへて現代にいたっているものである。

この「方言」という言葉は、もともと中国語であったようだ。中国の言葉に「五方」という言葉がある。中心があってその四方、それをまとめて五方ということらしいが、要するに地域が違えば言葉も違ってくるということを現しているそうだ。言葉が違うということだけなら、例えば、男の言葉と女の言葉の違いというものがある。しかし、どの村どの町へ行っても男の人と女の人が住んでいるわけだから、この言葉の違いは、地域差の問題、方言の問題とは言わない。

日本語の方言は日本における社会組織の発展と対応しながら、みずからその一部が話し言葉共通語や書き言葉をうみだす基盤としてはたらしながら、次の段階では、かきことばやはなしことば共通語に対する対立物となる。

日本語の方言は、歴史の中でみずからの内容と、日本語の中のほかの方言、はなしことば共通語、標準語との関係を変化させる。したがって、方言とは歴史的な内容をもつ概念であって、これを静止した不変の特徴をもつものとしてとりあつかうことはできない。

方言は標準語と対立するのである。こういう考え方で方言を見てみると、ある個人が言葉を覚えていくプロセスにも、方言と標準語の間に違いがあることがわかってくる。人間は、ふつう家庭の中で両親や兄や妹に囲まれて、いわば私的な環境の中で育っていく。つまり、ある個人が最初に覚えることばは方言だということになる。それに対して、標準語はふつう学校の教室にはいつから覚えはじめるものといっていいであろう。だから、ある個人が成長して、次第に公的な世界との関係を持つようになっていくことと、方言を覚えたあとで標準語を習得していくということとは、並行的なことと思われる。

学生C

「今の私」

オーストラリアのクエーンズランドから人文学部の4回のリーサという。私はちょうど7か月前に、日本に来了。日本語は一応勉強していたし、日本にも一度来たことがあったけど、その時はまだ、外国人にとって日本に住むことがどんなに大変か全然分からなかったが、不平をいうわけではない。昔から、外国で暮らして勉強するのが夢でだったし、この機会は一生に一度のチャンスのような事がよく分かった。

クエーンズランドのブリスベインで生まれて、5人家族と郊外の畑に育った。一般的に言えば、クエーンズランドは一年中良い天気がある、きれいなところである。ブリスベインの人口は百万人ぐらいと思って、生活費がそんなに高くなくて、多くの事に近いので、楽な生活できると言う意味である。

個人的に様々な興味がある。勉強の以外に、スポーツや音楽など好きである。スポーツについて、そのことを見るのが大好きである。子供の時からピアノとクラリネットもサクサフォンを習ったし、プロ音楽家友達もいる。彼らの練習やコンサートなど、よく聞いて行く。スポーツの中で女子サッカーとスキューバダイビング、向こうでやっていた。将来にグレート・バリアー・リーフの近いケアンズという町で日本人に教えるスキューバダイビングの教師として働きたい。

日本に来てから、いろいろな事情もあって、大学の空手道部に入ることにした。日本語会話練習や友達が出ること、カッコいい男の人と会うために役に立つと思ったからである。最初は空手をやったことがなかったし、言葉の問題のため、ひどく困ったけど、新しく我慢強い友達のおかげで、今の私はとても幸である。

「日本のイメージ」

私は、子供の頃から、ずっと今まで日本のことについて興味があった。小学校の時、授業でプロジェクトのテーマとして日本を選んだし、その時の私に「日本」という漢字がどんなに書きにくかったか今でも思い出せる。

高校に入ってから義務教育として日本語の勉強を始めた。それで好きだったし、将来役に立つと思ったから勉強をし続けた。高知に来る前、十四歳の時、一度日本に来たことがあった。来日前に日本は人口が多くて土地も狭いことが分かった。それにみんなお金を持って、ハイ・テック、工業化という国だと思った。

今の私は、ちょうど7か月前、高知に来了。その時から本当の日本について多くの事を学んだ。日本ではある所の名物は思った通り電気製品であるけど、同時に伝統的な日本の物も見える。一方で高知に来てからみんなお金を持っていないのがすぐ分かった。つまり日本といえはいろいろな製品を作って、歴史の深い国を思い浮かべる。日本人といえは働きバチとか心がいい人を思い浮かべる。

オーストラリアの一般の人達が日本のことをよく知っているとは思わない。たぶん日本ではみんなお箸で米を食べたり、お茶を飲んだりという国と思っているオーストラリア人が多いだろう。みんな特に広島のことについて知っていると思う。それにオーストラリアで日本のハイ・テックあるイメージと旅行している日本人がいっぱいいるから普通の日本人はお金持ちそうと思っているオーストラリア人もけっこう多い。

高校と大学の勉強によって日本のことを知った。映画とか、ニュースも新聞などで読んだ。向こうで日本人の友達もいるから日本の話を聞くことができた。

「日本人が持っているオーストラリアのイメージ」

最近、5人の日本人に彼等のオーストラリアのイメージについて、話してもらうために、会見した。私は向こうで日本語を一応勉強したから、日本に来る前、日本人や一般に日本のことをかなり知っていると思った。高知に来てから、知らないことはまだまだあることが分かった。しかし、私の日本の知識とくらべれば、会見した人のオーストラリアの知識はもっと少ないようだ。

一般のイメージは木と動物が多くて、暑いけど、とてもきれいな所である。会見した人が「オーストラリアで砂漠とさんごしょがいっぱいあるでしょう」とよく述べていた。

皆、オーストラリアの有名な動物の名前、例えば、カンガルーやコアラやイミューなど、よく知っていた。

次は「オーストラリア人と言えば、何のことを思い浮かべますか？」と聞いたら、砂漠に近い牧場に住んで羊や牛などを飼う人という答えがあった。オーストラリア人がお米を全然食べなくて、ナイフとフォークで、主に肉とパンを食べる人という答えもあった。

オーストラリアでアボリジニーという原住民がいるように分かった人が思ったより多かったけれど、その民族と白人種を離れて住んでいる状況があると思った日本人もいた。有名なオーストラリア人について言われた時、誰も知らなかった。皆、エアズロックとグレートバリアリーフとシドニーとキャンベラ、という有名な場所、よく聞いたことがあるそうだけれど、シドニーがキャンベラの代わりにオーストラリアの首都だと思った人が会見した。

天候はいつも晴れて海もきれいし、さんごしょがたくさんある意見もよくもらいました。皆、オーストラリアは広くて、一方で人口はあまり高くないという一般知識を持っていたようだ。一人日本人は、全国の道がまっすぐのイメージとさえ思った。もう一つはアメリカのことの方が知識を持っているようだ。その理由はよく分からないけれど、日本に来てから、全国でテレビや新聞などアメリカのことはよく伝えていっているように気が付いた。一般人達はアメリカのことに興味がありそうだ。

結局、いろいろな違う日本人からオーストラリアの話をしてもらった後、私はオーストラリア人として、ちょっとがっかりするようになった。私の国について、細かいこと誰も知っていないようだ。ある所と動物の名前だけである。その理由もあまり知らないけれど、私の意見で、世界のことに今の若者の知識が低いからと思う。一方で大学に入ってからさまざまな学部も入って、専門の勉強もしているのだから、ある国のこと別に興味はなかったら、多分その国に知識は普通だろう。

「高知新聞」

前の授業の宿題として、二週間の間に、オーストラリアに関係ある記事が高知新聞で搜していた。5月27日から6月10日まで毎日出た記事が集めた。14日間では合計11枚の記事になった。その中である記事がオーストラリアのこと直接に指示していないけれども、関連性があると思った。一つの例として、6月9日にあった記事は「ASEAN」のことについて書いてある。「ASEAN」というのは、東南アジア諸国連合のことであるが、一番最初の「A」という字はオーストラリアのことを示す。この記事は細かく述べたら、最新ASEANカー事情のことを説明している。

次は国際交流に関係ある記事があった。6月2日に川下りを楽しみながら、交流を深める参加した外国人はオーストラリアから含めていたらしい。

次は6月4日に出た記事はケーブルテレビに語っている。9月から有料放送を始めるようになって、オーストラリアのメディア王様、マードック氏のおかげで、今後、六チャンネルに増やす準備を進めている。

6月9日に見付かった記事が外国企業を支援するために、九州ではビジネス・センターを開設する。企業はオーストラリアなどから問い合わせが寄せられているということである。

五つ目は一番小さな記事だけれども、一九七八年から九六年までのコカコーラ・クラシックゴルフ大会の海外優勝のことを文字に記録していて、八九年にノーマン氏という有名なオーストラリア人は優勝者だったようである。

先の五つ記事はオーストラリアのことをあっさりと話していると思うけれども、次の六つの方が細かいである。驚くほど、音楽の方二つの記事に見付かった。最初に金管楽器奏者五人によるオーストラリアの「ブラシシモ」というバンドが5月30日に中村市の学校でミニ演奏会を行い、音楽の楽しさを子供達に伝えたという記事だった。もう一つはオーストラリアの音楽シーンについて、書いてある記事があった。特にティナ・マリナーというオーストラリアの歌手の世界的な活動と述べていて、来日公演が決まったユニークなロックバンド、スウープも細かくに話している記事である。

次の記事の表題は「オーストラリア旅行」だったので、目立った。高知市の「地球人クラブ」というセンターで国際交流できるようである。最近、オーストラリア旅行に人気を集めているから、このセンターでオーストラリア人と話すようになったそうである。

先の記事と似ていないように、この記事は高知西高校を訪問したオーストラリア・タスマニア州の「フレンズ・スクール」という姉妹高校から6月6日に15人の生徒達が来日したという記事だった。

6月7日に英国の狂牛病の影響で、クインズランド州からオーストラリア産牛肉の輸入活動は最近増えてい

て、クインズランド州からの対日牛肉輸は、年間十億オーストラリアドル(約八百五十億円)を超えているという小さな記事に出た。

一番最後は他の記事と全然違うと思う。シドニーで一九九六年度のヘヤスタイル展覧会を開かれたの事を説明していた。特には向こうの美容院の作品として、「洗濯挟み頭」とか「洗濯かご」という名称を付けている写真も出ていた。

二週間の間に毎日新聞を読んだ後、とてもいい勉強になったと思う。先に言及した記事を見付けるために、新聞で各部分に細かい注意をしなければならなかった。だからオーストラリアのことを捜しながら他の記事、たくさん読んでしまった。高知新聞の方は、集められた記事を見たら、世界的な事実や国際問題などより、もっと人生的なことで地元の催しの方が中心しているような感じがする。その理由で高知新聞のことを気に入るようになった。これから、時間がある時、読んでみたいと思う。

「日本とオーストラリアの国際交流について」

日本と日本文化にずっと子供の頃から強い興味を持っている私の一番最初の研究プロジェクトとしては、やはり一般的な人口や環境や地理のことがいいたろと思う、これを書くことにしました。まだ私が小さかった頃は伝統や歴史や習慣などこんなにも違う国がどうして存在しているのか、大変不思議なことでした。その時以来の多くの勉強から、そのことについてもっと詳しい知識を得ました。この論文の中では自分の勉強や経験に基づいて、他の国と日本の関係や外国から日本に来る人々の位置について話しています。

私は日本に来て初めて、この国に住んでいる外国の人々がどんなに少数かということに気がつきました。この状態が存在するには二つの理由があると考えます。

一つ目の理由は日本の長い歴史の中にあります。というのは世界のほとんどの国と違って、昔日本は対外関係を厳しく制限していました。いわゆる「鎖国」という政策が二百年以上続きました。「鎖国」というのは江戸時代の幕府が統一を強化するため、キリスト教の布教活動や海外貿易などを次第に制限するようになった時代のことです。

1635年には日本人が海外に出たり、海外から帰ったりすることさえ禁止されたそうです。こんな風に全国は統一され、日本の古い歴史や経済や文化などは強化され、独自のものが生まれました。近代化が遅れたため、西洋的な文化が日本に入ってきた時が今のようになちょっと変わった伝統と、現代のような混合文化の始まりだと思っています。このような理由で日本の都会や町に外国人が現れると日本人は今の現代でも思わず頭を向けてしまうのです。

日本において外国人の人口が少数を占める二つ目の理由は日本の言語のためです。皆さん御存じのとおり、日本語は世界で類のない、日本だけで話されている言語です。だから外国人として日本で完全に幸せな生活をするためには日本語の具体的な知識が必要になると思います。しかし、そうするためには何年間も日本語を勉強しなければなりませんので、一生日本に住もうという意志を持っている外国人でないとなかなか来ないと言えるでしょう。歴史と言語、先に述べた二つの理由には、他の国々と日本の関係が影響されていると言えます。

昔の国際活動は今と比べて当然かなり違っていました。昔は幕府が開国をした後、日本の近代化のためにいわゆる「お雇い外国人」を欧米から学術や技術を学ぶために招きました。「お雇い外国人」の数は1870年代が一番多かったといえます。これを初めとして、日本人も外国人も同じように自由に日本に往来できるようになりました。

今では日本で働く外国人は英語を教える職についています。このように日本に来る前にあまり日本語を勉強しなかった人でも日本で働くことができるようになりました。しかし、それ以外で普通の日本人のような仕事をしている外国人は非常に少数です。

そのような仕事につくためには前にも言ったとおりもっと深い日本語の能力が一番重要になると思います。またこの人達が日本人と仕事を争うには同じような要求に適わなければなりません。それは大変難しいことです。その他にもいろいろありますが、これが外国人にとって日本の会社の幹部に昇っていけない一つの大きな理由であると思います。

そして、ここでもう一つ、日本にいる学生についても話しておきたいと思います。日本に来るには主に二つの方法があります。一つは勉強または経験のため、短期間訪ねること、「教義訪問」といしましょう。もう一つはもっと長期間訪ねること、「留学」です。私の意見を言わせてもらえば、効果のある留学は6カ月以上滞

在することで自分の専門をやることです。もう少し詳しく言えば、当たり前のことなのですが、日本にいる外国人は日本語だけでなく科学から美術に至るまで国内の教育機関で勉強していますし、する専門科目は全部英語でできるようです。このように英語で勉強できるにもかかわらず、どうして日本に来る留学生はオーストラリアにいる日本人留学生より5倍も少ないのかと私は疑問に思います。

その上、日本にはどんな田舎でも最低三つは大学があります。それに対してオーストラリアの方は全部で百校程度しかありません。それとこの事実が少しがっかりさせることかもしれませんが、何百年も前から日本人が英語を学んでいるのに対し、オーストラリアの学校などで日本語の学習がはじまったのはかなり最近のことです。

日本語の学習はだんだん広まっていて、その結果、勉強や良い経験のできる所として日本に人気が集まっているように思います。オーストラリアで日本語の能力のある人々の仕事も、特に観光業の関係で増えてきています。

しかしオーストラリアと日本は留学活動をもっと助長すべきだと思います。両国は東南アジアの地域を指導している国なのでよい関係であるのが大事だと思います。自分の経験によれば、外国に住んで勉強したということは一生忘れられないことになると思います。

平成8(1996)年9月30日受理

平成8(1996)年12月25日発行

